

碧南を駆け抜けた 熱き風たち

—— 碧南人物小伝 ——



碧南市教育委員会

刊行に寄せて

この度、碧南にゆかりのある偉人を知るために、このような冊子を刊行することになりました。

私達は今21世紀という時代の中で、この碧南という地で生活しています。毎日の生活の中で何不自由なく一日を過ごしているわけであります。しかし、道路や施設、生活道具や製品をはじめ地元の文化というものは、決して一日にして成ったものではありません。

今日に至るまで、私達には想像もつかない先人達の知恵や努力や苦勞があったわけであります。そんな先人達の生き様を知り、それぞれの熱き思いや足跡を学ぶことによって、明日の碧南を発展させるための新しい「熱き志」を創成したいと願うものであります。

明日の郷土碧南を担うのは、子ども達です。その子ども達に主体的に郷土の偉人を学ぶ機会を与えるのは、とりもなおさず学校教育の中にあると思います。それは学校行事の中であったり、総合的な学習や学級活動や、時によっては教科の中にもあります。単に「読む」だけに終わらず、子ども達が何らかのアクションを起こすことで、その得た知識は主体的な知恵に深まります。さらに、明日の郷土碧南に新しい文化や文明を創っていく原動力になると信じています。

また、自分の学校の先輩が遺した「ある言葉」が、子ども達の生きる指針として現代に蘇らせるということも、意義のある行動の一つであると思います。

そのように本書が教師のための偉人学習の入門書となり、その知識や思いが、子ども達と創る学校活動や授業に深化されていくことを希望するものです。また、一般市民の方が本書を読まれることがあれば、郷土碧南を知ってもらうための一助になることを期待するものであります。

最後になりましたが今回の20名にとどまらず、資料の発掘や整理をする中で、今後1人でも多く碧南の偉人が紹介されていくことを期待し、本書を執筆・編集された関係各位に厚く感謝を申し上げます。

平成22年12月

碧南市教育長 長 田 良 次

目 次

＜小学校区順＞

＜敬称略＞

1	岡本兵松 ^{ひょうまつ}	(新川) 都築弥厚の「明治用水プラン」を実現させた苦節の碧南人	2
2	加藤平五郎	(新川) 北海道由仁村 ^{ゆに} の開拓に生涯をかけた石狩のミカワ男児	4
3	服部長七	(新川) 人造石を発明した土木の神様	6
4	角谷安兵衛 ^{やすべえ} 三代目	(中央) 瓦・土管・味噌溜 ^{たまり} 醸造業を振興、新川町発展にも尽力	8
5	石川八郎治 ^{さんぺき} 三碧	(大浜) 明治維新という激動の時代、老舗味淋醸造 ^{みりん} を全国一に	10
6	加藤菊女	(大浜) 一途な夫への愛が奇跡を生み出した伝説の貞女	12
7	清沢満之 ^{きよざわまんし}	(大浜) 信念の人、他力本願を究めた宗教哲学者	14
8	清見潟又市 ^{きよみがたまたいち}	(大浜) 今でも碧海郡出身力士の最高位に輝く毘沙門天の生まれ変わり	16
9	永井直勝 ^{なおかつ}	(大浜) 大坂冬・夏の陣でも戦功、七万二千石・古河城主 ^{こが}	18
10	徳本翁	(大浜) 富める者も貧しい者も公平に、118歳を全うした医聖	20
11	永井寶水 ^{ひんすい}	(棚尾) 高浜虚子と交流、西三河俳壇の巨匠	22
12	永坂奎兵衛 ^{もくべえ} 六代目	(棚尾) 奎兵衛鬼瓦を芸術に高め、学問を愛し続けた瓦師	24
13	平岩種治郎	(棚尾) 国産毛織機を発明、地域経済界の重鎮	26
14	藤井達吉	(棚尾) 生きることは芸術なり、碧南に生まれた孤高の芸術家	28
15	平岩千代治	(日進) 商売や流通方法の革命をもたらした昭和の三河武士	30
16	山中信天翁 ^{しんてんおう}	(日進) 知と財で勤王の志士を支えた文人	32
17	近藤坦平 ^{たんぺい}	(鷺塚) 東海初の洋式医学校を開設、地域医療にささげた白髭先生 ^{しろひげ}	34
18	山田忠治 ^{ちゅうじ}	(鷺塚) 水上機高度世界記録を樹立した海軍少将	36
19	伊藤証信 ^{しょうしん}	(西端) 「無我愛」運動に生涯を捧げた野の哲人	38
20	本多忠鵬 ^{ただゆき}	(西端) 幕末に生まれた小藩西端藩の最後の殿様	40

■ 時代に見る偉人の一生

42

1 都築弥厚の「明治用水プラン」を実現させた苦節の碧南人

ひょうまつ
岡 本 兵 松
(1821~1897/新川)



1 農業に転身しようと安城ヶ原の荒地を購入

岡本兵松は文政4年(1821)8月5日、大浜村鶴ヶ崎(現 新川町)に、岡本兵右衛門の分家岡本篠松の長男として生まれた。幼名を篠吉と言った。家業は味噌・醤油の醸造と廻船問屋を営んでいた。店は南部屋と言ひ、沼津藩(菊間藩)の御用達をつとめていた。

嘉永2年(1849)、28歳になった篠吉は、その年の9月、西尾藩士山内宇右衛門の妹、楚(そ)みと結婚し、父篠松を襲名した。そして同年、安城ヶ原の荒地である石井地区を買い取り、開墾に取りかかった。ところが夏の日照りと水不足で作物が枯れ、用水路の必要を強く感じた。

2 「都築弥厚(明治用水発案者)プラン」を聞く

4年後の嘉永6年(1853)、店の経営が思うようにいかなかったこともあり、農業に転職することを考え、石井新田(現 安城市石井町)の土地を購入することにした。この土地の所有者は、泉村(現 安城市和泉町)の都築増太郎と言ひ、明治用水の発案者として名を残す都築弥厚の身内の一人(弥厚の四男とも言われる)であった。しかし、ここは五ヶ野と言われる原で、水利のない荒地であった。

篠松は、矢作川の上流から取水し、台地上に用水路を掘り、そこに水を通すという「弥厚プラン」があることを増太郎から聞いた。

3 用水路開削に後半生をかけようと安城へ移住

安政5年(1858)、37歳の兵松は明治用水開渠(かいきょ)の設計について幕府に請願した。その後、家を弟の篠助に譲り、岡本友蔵という人の養嗣子となった。ここで名を兵松と改め、沼津藩の御用達をつとめるようになった。また、石井新田の山林15町歩を買い取り、水利を得るにはこれしかないと考え、弥厚の遺志を継ぎ明治用水開削を企てた。明治元年(1868)には、徒歩で京都に赴き、京都民政局に都築弥厚の計画継承を願い出た。しかし、明治政府は出来たばかりで、まだ行政機構が整っていないということから、兵松の請願は取り上げてもらえなかった。

翌明治2年(1869)、兵松は後半生を用水路の開削にかけようと、鶴ヶ崎の家財をたたんで石井新田の辻原へ転住した。自ら石井新田の戸長をつとめ、後戻りはしないという決意をしてのことであった。そのとき、兵松は48歳であった。

4 制度改革の時期で、度重ねた請願も無駄骨に

その後、兵松は豊橋に出来た三河裁判所へ請願書を提出したが、そこも年内に廃され聞き入れられなかった。次に赤坂(現 豊川市赤坂町)に出来た三河県の役所へ出願したが、それもうやむやのうちに廃県となってしまった。

明治4年(1871)7月、廃藩置県が行われたことから、伊奈県支庁足助局(現 豊田市足助町)が出来、兵松はそこへ第4回目の出願をした。この役所で、ようやく取り上げられることとなった。ところが、これもまた廃され、同年11月に額田県と

なった。兵松は、この5ヶ年間の苦労が全く無駄骨になってしまったことを嘆き、氣力を失ってしまった。

5 7回の請願で、やっと県も動き出すが、心労で病に倒れる

それでも氣を取り直し、新しく図面書類を作って第5回目の出願をした。ここで一応採用されることになったのだが、明治5年(1872)11月には額田県は愛知県となり、喜んだのもつかの間であった。翌年、それでも兵松は「伺い書」を持って県庁へ出向いた。兵松の執念は変わることはなかったのだ。一方、同年、伊与田与八郎は「七ヶ村悪水計画」の願書を提出していた。県からは、両者の計画を実地測量をした結果、同一地域(碧海郡)であり、兵松と合体して再願せよと言われた。

それで同年9月、兵松は伊与田と連署して第7回目の再願書を提出することになった。これによって、いよいよ用水路開削計画は、県の積極的な姿勢もみられるようになってきたのだ。

そうして明治8年(1875)に「用水路開削測量細密図明細書」に村人の許可を得ようとしたところ、反対する農民が兵松の家を襲撃するという事件が起き、とうとう兵松は心労のため病に倒れてしまった。

6 苦節12年、大工事「明治用水」が竣工

明治11年(1878)、やっと明治用水開削の許可がおりた。兵松は村々を歩き、農民の説得を、伊与田は県庁との交渉、出資者の確保にあたった。県との間で資金のことで紆余曲折はあったものの、翌明治12年(1879)1月から開削の大事業は始められることになった。そして工事はすべて県主導で行われた。

明治13年(1880)4月18日、本流工事の完成を祝して、水源(現 豊田市水源町)の地で、成業式が行われた。兵松や村人の喜びは大きかった。祝辞を読んだ兵松にとって、苦節12年、人生最良の日であった。

ところがその夏、疲労が重なったことから再び病(膝骨動脈症)にかかり、愛知病院に入院した。この頃、兵松がどれほどの人物であったかは次の事実でも明らかである。時の明治政府を代表して、農商務省品川弥二郎大輔(たいふ・次官)が見舞いに訪れたほどであったのだ。

続いて中井筋と東井筋の工事が進み、翌明治14年(1881)には、西井筋が完成し、9月に「明治用水」と命名された。用水完成後に兵松の詠んだ歌に「ふりかへり見るや 尾花に招かれて 行く川に青田の風や 村つづき」がある。

7 教育にも力を注ぎ、村の功労者として崇められた晩年の岡本兵松

明治16年(1883)に病が快復して退院すると、自宅を開放して私塾を開き、村の青少年の教育を行った。自ら読書、算術を教授したということである。その秋、兵松は政府から藍綬褒章を贈られた。

明治27年(1894)、顔面胸部の疾患のため障害者となった。そして、その3年後の明治30年(1897)に苦難に満ちた生涯を閉じた。76歳であった。

明治32年(1899)に兵松の功績を称えて、石井新田村に立派な記念碑が建てられ、明治川神社に合祀された。更に昭和

25年(1950)明治用水利用者たちは、石井村に銅像を建設して、その徳を顕彰した。

羽久手グランド奥にある新川神社には、新川出身である角谷安兵衛や服部長七と共に大人命として祀られている。

◆もっと知りたいなら

・『岡本兵松』(平9季刊誌『みどり』

神谷素光)

・『岡本兵松』(平20『明治用水をたずねて』

明治用水土地改良区発行)

2 北海道由^{ゆに}仁村の開拓に生涯をかけた石狩のミカワ男児

加藤平五郎 (1860～1925／新川)



1 1歳で本家に養子、謹直で計算能力に優れる

加藤平五郎は、万延元年（1860）碧海郡棚尾村（現 碧南市志貴町）加藤平兵衛の五男に生まれた。1歳のとき大浜村浜尾（現 碧南市鶴見町）にある本家、加藤磯治郎の嗣子として移籍した。

慶応3年（1867）7歳のとき、近くにあった精界寺（現 碧南市住吉町）の佐々木恵遠に初学を習い、師が若くして亡くなると、鶴ヶ崎（現 碧南市浅間町）西光寺の清沢最天の塾に通い、和漢の書を学んだ。14歳のときには近隣の子に計算の初歩を教えるほどに進歩していた。

明治13年（1880）、20歳になると大浜村役場に勤めた。謹直な性格で計算能力に優れ、名古屋で行われた珠算大会でも優勝し、町長の信頼もことのほかあつかった。

2 豪商岡本八右衛門の番頭に、米津や安城の開墾に成功

当時、村会議員として役場に出入りしていた鶴ヶ崎の貿易商、岡本八右衛門は、平五郎の優秀さに注目していたが、明治16年（1883）、北大浜が分村独立したのを機に、直ちに平五郎を番頭に迎えた。岡本の店（「カネ八」）は郡内トップの豪商だったが、明治村の所有地が岡本兵松（岡本八右衛門の同族）の明治用水開削により開墾の見通しができたので、明治20年（1887）、和泉村（現 安城市和泉町）に事務所を開いた。岡本は、平五郎を支配人、篤農家のモデルとなる板倉源太郎を監督に命じ、米津村や安城ヶ原の原野を開墾した。4年後、第一岡本農場 34 町歩の開墾に成功した。

3 開拓農業をもくろみ、北海道へ

第一農場開墾で、開拓農業技術を体得した平五郎は、「カネ八」の貿易先として、情報の蓄積のある北海道の開拓を図った。明治27年（1894）、34歳のとき現地調査のため単身北海道へ渡った。そして、開拓適地を定めて一旦帰郷した。

翌年妻を携え開拓民19名と共に新川港を出帆した。上野から青森までは汽車で、青森から再び船に乗り換えて北海道の新天地を目指した。

4 ^{みかわ}三川停車場の開設に尽力

最初は寒さの害で、作物の収穫ができなかった。明治30年（1897）に日常生活の便宜をはかるために三川（三河にちなんでつけた名）停車場（北海道炭礦鉄道・現 JR 室蘭本線）の開設に努力した。由仁村が大きく飛躍するステップの契機を作った。

この誘致に対する平五郎の熱意は、相当なものであった。監督官庁のある札幌へ連日30日間通って陳情を続けたのだ。その結果、条件付きながら誘致に成功した。その背景には、平五郎の開拓に邁進する情熱と、一貫した誠実さが官庁側に好意をもたれたからでもある。

停車場の開設が、農産品の輸送の効率化を果たしたことは当然だが、そのために人々の往来が活性化し、宿屋・商人の開業する者が増え、現在の中心街へと成長し

ていった。

5 精神面の安定を図り、人づくりにも力を注ぐ

精神面での安定に心を配り、私費で神社を祀り、寺院を建て、墓地を設け、人々に墳墓の地としての意識を植え付けた。また、随時説教師を招いて法話を聴かせ宗教心の涵養を養成した。翌明治 31 年（1898）には、三川簡易教育所を開いて教師を招き、農民子弟の教育を重視し、適宜学用品を供与した。貧困者の子弟には、弁当さえ与えて出席を励ました。

また、住民のために明治 32 年（1899）に三川仏教説教所を開いた。

6 生活の向上と基盤整備にも力を注ぐ

明治 31 年に、家屋 14 棟が流出するという大水害を受けた。その後も干害・冷害・いなご大発生などに苦しんだ。だが、平五郎はそれらの苦難に負けず、排水路を開削し、橋をかけ、ため池をつくるなどの開拓を行い、農地の生産性の向上を図った。

明治 40 年（1907）には、公共性を重視して郵便局も開設した。治安の維持にも気を配り、巡査駐在所を誘致したりした。

更に生活面での農民の利便を配慮し、事務所に味噌、醤油、砂糖、木綿、紙類などの日用品を置き、不便な買い物の手間を省かせ、しかも困窮者には代金を無期限で貸与した。

こうして 1 千町歩という広大な原野の開拓成功は、他の資本主義地主と異なり、常に農民と共に自ら歟を振るい、苦楽を共にしたことにあった。

7 皇太子殿下の行啓で御下問をうける

大正 8 年（1919）11 月、皇太子裕仁親王殿下（後の昭和天皇）の北海道行啓の際、由仁村開拓の平五郎は、札幌の豊平館に農民の石狩代表として召された。殿下より御下問をうけ、北海道における開拓事情を直々に答えた。下賜された御菓子に、臥薪嘗胆の歳月の労苦が報われた思いが込み上げ、感涙の涙を流したと言われる。

8 晩年の顕彰の数々

大正 10 年（1921）に大日本農会より農事改良の功により表彰された。大正 12 年（1923）には、由仁村農会の会長に選ばれた。大正 14 年（1925）4 月に勲八等瑞宝章を授与されたが、同年 7 月に 65 歳の生涯を閉じた。

昭和 5 年（1930）、由仁町の人々は平五郎の功績をたたえて三川駅前に胸像を建てた。

9 由仁町と碧南市は、青年友好都市に

平五郎の開拓が縁で、昭和 63 年（1988）4 月 5 日に由仁町と碧南市は、青年友好都市として提携調印した。平五郎が見知らぬ土地に種をまいた志が、約 1 世紀の時を過ぎ、青年友好都市という新しい芽が息吹き出したことになる。

その後 20 数年を経た現在に至るまで交流が続けられ、「ミカワ」という互いの地に美しい花を咲かせている。

◆もっと知りたいなら

・『石狩の三河男児』（昭 62 加藤良平）

・『加藤平五郎』（平 11 季刊誌『みどり』加藤良平）

3 人造石を発明した土木の神様

服 部 長 七

(1840～1919／新川)



1 左官業、醸造業、饅頭屋をやる

服部長七翁、天保 11 年（1840）9 月 9 日、愛知県碧海郡棚尾村（現 碧南市西山町）で父幸助、母けうの三男として生まれた。

長七が 15 歳のとき、左官をしていた父が亡くなった。豆腐屋をやったりしたが、17 歳で桑名に渡り、左官の見習い修行をした。一生懸命頑張り、年々奉公の明ける前に一人前の仕事をこなせるまでになった。

18 歳で故郷の新川に戻り、左官業を始めた。一心に仕事に励み、得意先も増えた。しかし 20 歳のとき、もっと割の良い仕事はないかと考えた。

今まで貯えたお金を持って、遠縁で居酒屋を営んでいた桑名の牧野という人を訪ねた。共同で醸造業をすることになり、昼夜もいとわず働き、年々事業は繁昌していった。ところが明治維新を迎え、事業も縮小しなくてはならなくなってしまった。

長七は醸造業から手を引き、桑名でとら屋という饅頭屋をやった。うまくいっていたが、再び故郷へ帰り、酢製造業を手がけた。

2 「東京市民に良水を」という夢、大久保利通邸の工事も手がける

酢製造業もうまくいっていたが、帰郷して 1 年程した明治 6 年（1873）33 歳のとき、一儲けしようと上京した。日本橋で饅頭店を開業し、店は大変繁昌した。ある雨の降った日、井戸水（水道水）が濁り、小石川の白堀を見学し、その汚さに呆然とした。長七はきれいな水を東京市民に供給するには、濾水器を作って水を濾過することが必要だと考えた。それを「たたき」で作れないか考えた。長七は饅頭屋を閉め、たたき屋になった。ところが世間では振り向かれず、一家の生活は困窮し、吹き矢の露天商などをやり、夢の実現に向け一生懸命働いた。

明治 8 年（1875）、やっと仕事が舞い込み、ある家のたたき工事をした。偶然その工事の様子を見た男がたたきに興味を抱き、いろいろ長七に尋ねた。しばらくして天皇陛下の御学問所の工事を頼まれ、見事に竣工した。その後宮内省の仕事をすることになり、大久保利通や木戸孝允邸の工事もすることになった。「東京市民に良水を」という長七の夢は、大いに感心され、激励を受けた。

3 土木屋「服部組」の発展

井戸側の工事をしているとき、目塗りした所の泥が堅くなっており、ある配合で作ったたたきは水中で石のように堅くなることを発見した。その後何度も改良を重ね、いわゆる「長七たたき」を発明した。長七が 36 歳のときだった。

明治 10 年（1877）第 1 回内国勸業博覧会が催され、会場の床や泉水池の工事を行ったりした。工夫を凝らし立派に完成させた。内務省の品川弥二郎（後に子爵）や万博責任者の田中芳男にも知られるところとなり、強力な後押しを得た。

その後、岡崎の夫婦橋工事をたたき工法で行った。信心深い長七は、工事完成間近、岩津天満宮（現 岡崎市岩津町）に参籠した。その夢枕に現れた仙人のお告げにより立派に完成させた。しかし、「長七たたき」は、水道工事より堤防や港づくり、新田開発に向いていることを悟るようになった。

4 新たな夢、新田・港づくり

明治 14 年（1881）、農商務省の外国人役人が「この人造石は何ですか？」と問いかけたことから、「長七たたき」は「人造石」と呼ばれるようになった。

人造石を使った工事の先駆けに高浜の新田開発を考え、多くの借財をして事業に乗り出した。借金は、莫大にふくらんだが、田中や品川の口利きで、銀行から金を借りることが出来、明治 15 年（1882）春、全工事は見事竣工した。

5 宇品港（広島港）築港や神野新田（豊橋）の難工事を成し遂げる

人に人造石の作り方を教えたりし、常に私利・私欲を捨て、国益の増進に努めた。長七の評判は高まり、明治 17 年（1884）には宇品築港の計画を委ねられた。多くの難工事に莫大な資金が使われた。しかし、余分にかかった費用は長七の自費で負担するなどして、明治 22 年（1890）11 月に竣工し、後に軍港として栄えた。

明治 26 年（1893）、名古屋の実業家神野金之助に豊橋の新田開発を依頼された。一番の難工事の潮止め工事が同年 9 月 17 日に行われた。数千人の人夫が紅白両軍に別れ、太鼓を合図に工事にかかった。まさに戦国時代の合戦さながらの状態だった。50 代半ば、取り仕切る長七のアイディアとリーダー性が最も輝いた時期だった。長七は無学文盲と自称し、書を残さなかった。しかし、水と風を教師に工夫と情熱で工事のリーダーシップをとり、「人を動かす術」に長けていた。

6 熱田港（名古屋港）築港、晩年に岡崎岩津天満宮に隠栖

服部組は全国数十箇所に支店を持つ程に成長し、緑綬褒章を拝受した。明治 30 年（1897）、人造石工法で名古屋築港を請け負い、郷土のためにと長七は赤字覚悟で工事にかかった。私利・私欲を捨てた長七の郷土愛は地元新川の人々を動かし、手弁当で工事に参加した人もたくさんいた。服部組は名古屋港築港工事などで多大な損失を被ったが、明治 35 年（1902）に長七の工事は終了した。広げすぎた支店、コンクリート工法の普及なども重なり、明治 37 年（1904）、長七は一切の事業から引退した。長七の工事竣工後、浚渫工事などに 4 年の歳月をかけ、明治 39 年（1906）、名古屋港は開港した。その後 8 年の間、新川で貧困生活を送った。（盛んだった頃は千坪程の屋敷を所有）

明治 45 年（1912）、長七は岩津天満宮の社殿造営に短い余生をかけようと、妹とその娘を連れて天満宮に隠栖した。姪のゑいを養女にし婿を迎えて精力的に動いた。

晩年にあっても大財閥の安田善次郎や憲政の神様尾崎行雄とも交友があり、人生に対する気概と前向きな性格は少しも衰えなかった。しかし、大正 8 年（1919）、長七は最後まで律儀と気骨のある一職人を通し、79 歳の波瀾万丈の人生を閉じた。

7 功績とその後の顕彰

亡くなった翌年、新川精界寺に地元有志によって碑が建てられた。また、新川神社には、大人命の一人として祀られている。高浜には「服部天満宮」があり、地域の鎮守様として今でも祀られている。長七は岩津天満宮では中興の祖として崇められ、毎年同宮にて「長七忌」が営まれている。昭和 36 年（1961）には岡崎市名誉市民になっている。

また、長七の人造石は世界遺産のアンコールワット遺跡の修復にも使われ、自然環境に優しく、その価値が見直されてきている。

◆もっと知りたいなら

- ・『服部長七物語』（平 22 市史料別巻 5 浅井久夫）
- ・『服部長七伝』（昭 30 中根仙吉）（平 8 同上天満宮復刻版）
- ・『服部長七と人造石』（平 10 季刊誌『みどり』加藤良平）

4 瓦・土管・味噌溜^{たまり}醸造業を振興、新川町発展にも尽力

角谷安兵衛^{やすべえ}（三代目） (1840～1919／中央)



1 「稲安」^{いなやす}の家に三代目安兵衛として生まれる

角谷安兵衛は、天保 11 年（1840）1 月 2 日、大浜村道場山にて、二代目安兵衛の長男として生まれた。幼名を弥三郎、保平といい、後に三代目安兵衛となった。生家は享和元年（1801）に浜尾の稲荷山で瓦製造を始め、「稲安」として知られていた。

弘化 3 年（1846）、6 歳で浜尾の高橋文亮の寺子屋で学ぶようになった。そして、嘉永 5 年（1852）より家業に従事した。そのとき安兵衛は 12 歳であった。安兵衛が経営の中心になるようになった慶応元年（1865）より、「稲安」は味噌、醤油醸造も合わせて行うようになった。

2 新民序^{しんせい}の使丁として、驚塚騒動に銃を持って駆けつける

明治 3 年（1870）に大浜陣屋内の士族階級の学校、日新館（翌明治 4 年 2 月に新民序^{しんせい}が出来る）の付属使丁（仕丁とも、小使い、用務員）となった。

明治 4 年（1871）、驚塚騒動（廃仏毀釈に端を発した浄土真宗門徒と菊間藩の役人との争い）の際には、31 歳になった安兵衛は、これを収めるために種子島銃を持って新民序まで駆けつけたという。

3 大浜村分村問題、北大浜村の初代戸長として解決に尽力

明治 9 年（1876）、安兵衛は 36 歳で大浜村改組取調係に就任した。その後 5 年程した明治 14 年（1881）頃から大浜村では北部の有力者である板倉玄四郎らを中心に分村計画が進められた。翌明治 15 年（1882）になって岡本坂太郎（当時 29 歳で上組取締兼土木係・弟の小次郎は、服部長七の大番頭）他 894 人が愛知県令国貞廉平に「分村願」を提出した。その理由は次のようであった。

- ① 大浜村は、地形が南北 2 里余あり、土地の事情が違い、互いにそれぞれの土地事情に暗く、戸長 1 人、役場一ヶ所では不便不都合である。
- ② 南部は漁業及び商業が多く、北部は工業及び農業が多く、それぞれ利害が一致しない。
- ③ 村会議員の人員は、戸数の差によって南部に多く、北部に少ない。それに反して、村費の負担は北部に多く南部に少ない。南部は常に土木営繕を主張し、北部は節約を主張している。これは南部が依頼心を持っているからだ。

しかし、この「分村願」はすぐに「詮議及び難し」として返された。このように難儀を極めた分村問題は、岡本坂太郎や市古良策（当時 33 歳で漢方医の息子、後に春平と改名、自由党员。村会議員の岡本八右衛門と緊密な連絡をとった）らの献身的な努力によって 3 年の年月を経た明治 16 年（1883）にその目的を達成した。ここに大浜村は、大浜村（南大浜村）と北大浜村に分村された。

ちょうどこの年 11 月、角谷安兵衛は北大浜村の初代戸長となった。ただ、安兵衛が戸長になったその後も、神社や地所、土木費や村費などの諸問題でいざこざが絶えなかった。それでついに愛知県令の諭達があり、これに基づいて北大浜村でも明治 19 年（1886）2 月 29 日に臨時村会を開いて「今般御諭達ヲ拝承シ、両村和熟誓約書」を作成・決議した。大浜村戸長の石川八郎治、北大浜村戸長の安兵衛と、

碧海郡長市川一貫県令代理に奥書をもって提出した。そしてこの「分村願い」は、同年3月31日に聞き届けられ、大浜村の分村問題はやっと解決するに至った。

明治22年(1889)、安兵衛は50歳で北大浜村村長に就任、後碧海郡会議員や参事会員になった。なお北大浜村は、北棚尾村との合併を経て、明治25年(1892)より新川町に改称された。

4 土管業「三陶組」を引き継ぎ、巨額の利益をあげる

明治20年(1887)、まだ北大浜村といていた頃、安兵衛は、岡本八右衛門、亀山竹四郎、服部長七と共に、共同で「三陶組(土管製造)」を設立し、市場に進出して常滑土管に挑戦した。

当時、新橋鉄道局が線路敷設のため、多量の土管を購入することになったので、三陶組は見本を提出して、採用を請願した。ところが常滑の業者は、地場産業の販路独占のため、三陶組は堅牢さに欠けると誹謗した。これに黙ってはおられず、服部長七の東京支店長泰鍬治郎名義で、農商務省(通商)に分析を申請した。その結果、焼成熟度は強く、質は堅硬緻密であることが証明され、以後鉄道局は多額の三陶組製品を購入し、三陶組の名が高まった。

加藤平五郎(新川出身の北海道由仁町開拓者)との縁もあり、北海道へ売り込みをしたが、いろいろな障害のため交渉がまとまらず、土管が長期間厳冬の風雪にさらされて品質が低下、多額の損害を出した。そのため三陶組は、明治27年(1894)6月に解散した。

しかし、解散した三陶組を安兵衛は引き受け、単独で事業を継続した。幸運にも日清戦争後、各種の事業が勃興する機会に恵まれ、需要が供給を上回る好況が到来した。なかでも山陽鉄道の土管は、ほとんど安兵衛が納入し、年商3万円の巨額に達した。安兵衛の土管の優秀さは、九州鉄道、東北鉄道の納入にも成功した。

明治31年(1898)頃から隣接地で同業者も製造を始めるようになった。明治37年(1904)、安兵衛は味噌溜醸造業に専念するため、土管部門のすべてを太田喜太郎と吉田福太郎に譲渡した。

5 瓦製造振興にも努め、数々の公職に就き、新川町発展のために尽力

明治31年(1898)に新川町収入役に就任、以後数々の職務に就いた。その役職と就任当初の年齢を挙げてみる。新川町奨励慈善会々長(60歳)、新川町会議員(61歳)、新川町商工会長(63歳)、新川町助役(71歳)、新川町学務委員(74歳)等である。

また、明治43年(1910)、安兵衛が70歳のとき、西三瓦製造同業組合が創立され、その人望から安兵衛は組合長に選ばれ、瓦製造業の振興にも力を尽くした。

大正3年(1914)には、74歳の高齢でありながら新川町学務委員に選ばれた。晩年は新川町奨励慈善会の会長として、広く町民の徳育分野にも奉仕した。

大正8年(1919)3月26日、79歳で死去した。

新川羽久手グランド奥にある新川神社には、新川出身の偉人である服部長七(人造石を発明した土木の神様)、岡本兵松(都築弥厚の明治用水プランを実現させた苦節の碧南人)と共に大人命として祀られている。(昭和2年創建)

また、昭和25年(1950)から昭和30年(1956)まで藤井達吉が碧南市道場山に住まいしたことは周知の通りであるが、その住まいは角谷安兵衛家所有のものであったことも有名な話である。

◆もっと知りたいなら

- ・『岡本八右衛門の時代』(平7加藤良平著)
- ・『碧海郡新川町上』(平5加藤良平著)
- ・『碧南市史 第2巻』(昭45市史編纂会)

5 明治維新という激動の時代、老舗味淋醸造を全国一に

石川八郎治(三碧)^{さんぺき} (1844~1923/大浜)



1 石川八郎右衛門家第八代として誕生

石川八郎治(三碧)は、天保15年(1844)、九重味淋で有名な石川八郎右衛門家の第八代(和泉の石川信英・のぶさを石川八郎右衛門家の初代として考えると八代目。和泉村の石川家から数えると信英は十八代だから、八郎治は第二十五代当主となる)として生まれた。

大浜の産業発展の歴史は、港と廻船、そして製塩と醸造などが中心であった。石川家は、そこで代々庄屋・名主を務め、これらの産業の中心を担ってきた。

三碧(ここでは以下明治40年改名の「三碧」名を使う)は、幼名「吉次郎」といい、慶応4年(1868)に25歳で家督を継ぎ、「八郎右衛門」を襲名したが、その2年後「八郎治」と改名した。明治維新を迎え、三碧の気概を感じさせる出来事である。(その後2代は「八郎治」を襲名したが、十一代の現社長は4代前の「八郎右衛門」を襲名し、人々を驚かせた)

2 8歳で茶席を設ける

嘉永5年(1852)、三碧(この当時は吉次郎)は8歳のとき、宝珠院に「登山(とうざん・修行・修学のため寺に入ること)」した。その後に諸種の学識と共に茶の湯の作法も身に付けていった。安政4年(1857)には三碧が茶席を設けた記録が残っている。

父も同席する中、茶宴中に交わされた話題には、時流や施策などに関する最新または裏情報などもあったことと想像される。三碧にとっては、教養を身に付けることと同時に人との交わりや会話の術を得る重要な機会になった。

3 「学校掛」「学校取締」など教育関係の公職を務めた

三碧は本業である九重味淋の仕事の他に、重要な公職に任命・選任された。三碧が、ちょうど明治維新を迎えた頃、明治新政府は廃藩置県後の三大重要政策、「徴兵令」と「学制」と「地租改正」を打ち出した。そして青年三碧は「徴兵令」を除く二つの制度に深く関わっていった。

「学制」は、明治5年(1872)8月3日頒布の制度である。三碧はその2年前に「学校掛」「学校取締」になっていた。それまでは「御用達肝煎(ごようたしきもり・名主、庄屋の異称)」であった。明治4年(1871)7月14日廃藩置県の詔書が下り、菊間県は11月15日に額田県となり、翌明治5年、額田県が愛知県に併合されるなど、時代は目まぐるしく変わっていった。

4 いろいろな議員に選出され活躍する

議員職としては、三碧は延べ7回選ばれた。石川家は従来名主・庄屋職(明治5年4月に廃止)であったわけだから、議員に選出されるのは当然であったかもしれない。ただ、新しい時代になり、「民意によって選出される」という事実は重要で、三碧自身選出された役職を断ることはなかった。そしてこれらの議員職は、あくまで「地租改正」をするためのものであったと思われる。

ちなみに県会議員の選挙権は、地租5円以上を納めることが条件であったから人口の4~5%でしかなかった。被選挙権にいたっては、地租10円以上だったから、1町5反以上の地主に限られていた。

5 地租改正の総代になり、経営感覚を磨く

三碧は明治8年(1875)に愛知県から「第九大区邨々地租改正総代」に任命された。地租は明治政府でも主要な収入源で明治6年(1873)地租改正条例を布告し「これまでの田畑貢納の法は一切廃止し、土地を調査して地券を渡し、その地価の3%を金納する」旨定めた。いずれにしても三碧は、32～3歳という壮年に達したばかりの時期に、地租改正という難問に関与したわけだ。ただそのことは、三碧の企業経営感覚にプラスに影響していったことは確かであろう。

明治12年(1879)には、大浜村戸長となり、翌年からは県会議員になった。その後大浜村分村問題が起こり、三碧は力を尽くした。明治19年(1886)に私立英学会を設立し、その3年後には大浜町の学務委員になった。

6 インフレ時には企業規模を縮小し、力を蓄える

明治初年、三碧は多くの公職に尽力していたが、反面本業の九重味淋は、これ以上縮みようのない程に営業規模を小さくしていた。この当時は国立銀行が全国に設立され、紙幣乱発が行われたため、新政府の財政基盤を弱体化させた。また、西南戦争(明治10年<1877>2月～9月)の軍費調達を政府紙幣の増発に委ねたこともあり、世間にはインフレの波が押し寄せていた。

このような時期に企業を縮小し、公職に奔走していたことは、かえってその後の九重味淋の急発展の基を作った。三碧の経営手腕のたまものであったとも言えよう。

7 清沢満之とも交流、味醃醸造に専念し経営手腕を発揮

50歳になった明治27年(1894)頃からは、三碧は大浜町以外の政治界の関係を断ち、味淋醸造に専念し出した。そして三碧は汽罐・汽機(ボイラーとスチームエンジン)の導入など経営手腕を発揮し、順調に経営規模を広げていった。

また、隣の西方寺に清沢満之が滞在しているときなどは、互いに行き来した。三碧のほうも20歳程歳上ではあったが、東京事情を満之に尋ねたりして新しい情報や学問を学ぼうとした。

明治42年(1909)北米シアトルでアラスカユーコン太平洋博覧会が開催され、九重味淋の「九重櫻」が出品されることになり、見事「名誉大賞牌」の栄冠を得て、その名を海外にも知らしめた。

また、同年頃改称された「愛知県碧海郡酒造組合」の組合長にも選出された。当時の味淋生産量は、4千石の碧海郡が他県などと比較して際立って多かった。その中でも九重味淋は、1社で千石以上を生産していたという。三碧の最初の内孫に「満千(まち・千に満ちる)」と名づけていたことから、三碧の喜びが伝わってくる。

8 大正天皇に拝謁、文人としての一面も

60歳で長子に家督を譲った三碧は、富岡鉄斎(日本近代画壇の巨匠)に絵を学び、明治40年(1907)に「三碧」と号した。また、大正2年(1913)11月、尾張・三河において陸軍特別大演習が行われ、日本で初めて飛行機や気球も参加した。そのとき69歳の三碧は、実業功労者として、即位間もない大正天皇に拝謁した。

その後も各種の品評会などで、その高品質が認められ「九重櫻」が大賞や優等を取り、宮内省などのお墨付きをもらう中、大正12年(1923)4月14日に永眠した。その4ヶ月半後に起こる関東大震災を知らずに……。

◆もっと知りたいなら

- ・『九重味淋220年史』(平9九重社史編集会)
- ・『大浜町誌』(昭4石川八郎右衛門編纂)

6 一途な夫への愛が奇跡を生み出した伝説の貞女

加藤 菊 女

(1703? ~1773/大浜)



1 書や画才に優れた教養豊かな女性

加藤菊女は、元禄 16 年（1703）頃、尾張藩士五百石の林治左衛門久保を父に、その妻とうを母に生まれた。

当時幡豆、碧海の一部を所領していた旗本三千石津田外記の代官役を務めていた加藤四郎左衛門泰栄（やすひで）の子息友右衛門の許に、享保元年（1716）の頃菊女は縁あって嫁いだ（後妻）。そのとき、菊女は 15、6 歳であり、画才に優れ書にも通じ、万事教養豊かな女性であった。また、上品な人柄も備えていた。楽しい幸せの生活がしばしの間続いた。

2 信仰厚い菊女の嫁ぎ先、加藤家

加藤家は大浜の中須賀（現 音羽町二丁目地内）に住む土豪であり、津田外記が宝永 2 年（1705）采地（領地）替えて、それまで天領（江戸幕府直轄の領地）であった伏見屋新田の一部 480 石が外記の領分となるに及び、その代官を仰せつかった家柄であった。また、大浜下村の三島安兵衛、鷺塚村の片山八次郎などの名家とも縁続きの間柄であった。また信仰も大変厚かった。

3 孫市事件

享保 3 年（1718）、江戸日本橋の白木屋で、若い僧 2 人が縁山貫主（芝増上寺の貫主）の命令と偽り、袈裟地織物数巻をだまし取って逃げたことがあった。

そこで白木屋より公儀（幕府）へ願い出があり、捜索が開始された。1 人の僧は勢州（伊勢の国）にて捕らえられた。もう 1 人の僧は、三州中山（現 碧南市伏見屋）貞照院に逃げ込んだという情報で、捕吏（ほり・罪人をめしとる役人）が白昼寺内へ突入した。寺では大鐘をつき、近隣に非常事態を知らせた。

鐘の音を聞き、近隣の百姓たちも大勢集まってきた。そして、百姓たちは、捕吏を盗賊の僧と見間違え、暴行を始めた。駆けつけた西尾の賭場の魁（かしら・親分）孫市は、捕吏から金を出させて寺や農民たちをなだめ、村外へ追い出した。ところが騒動に紛れ、実犯人の若僧は逃亡し、捕吏も仕方なく江戸に帰った。

4 事件の結末、加藤四郎左衛門は伊豆大島へ島流し

この事件により公儀は、貞照院の看守宗心法師と大浜の代官役であった加藤四郎左衛門泰栄を、伊豆大島へ島流しの刑に処した。その他に孫市も打ち首、八か村の百姓の若者たちは、「叱りおく」という判決を下した。ただ、加藤四郎左衛門泰栄は、高齢のため、菊女の夫、友右衛門が父の身代わりとなり、大島に流された。断罪は事件の翌年、享保 4 年（1719）であったと思われる。世に「孫市事件」と言われる首尾不透明な事件の結末であった。

5 島流しになった夫、友右衛門は辛苦にみちた日々を

友右衛門は貞照院看守宗心と共に伊豆大島の新島村（現 元町）に渡った。友右衛

門と共にわびしい境涯にあった宗心は、憂悶の幾年かを経た享保 11 年（1726）1 月、再び故郷の土を踏むことなく、この地で相果ててしまった。今も大島潮音寺に、「法名安善想心法子」「三州流人」と認められた過去帳が残されているという。その後も、友右衛門は今日の生、明日の死を覚悟して、辛苦にみちた月日に耐えた。

6 お百度と写経の毎日の菊女、手紙を海に流し続ける

一方菊女は、伊豆大島にある夫を想い、安らかにできず、嘆き悲しんだ。菊女は大変信心深く、それからというものは大浜村熊野権現に、日参祈願を決意し、毎夜はだし参りのお百度をふみ、風雨霜雪も構わずに拝伏して夫の無事帰国を祈願した。

家にあっても留守を守り、両親に仕えた。また、心魂を捧げて写経に打ち込み、毎日のように自分の手紙と写経の一部を竹筒に納めて、これを伊豆の方に向かい、海中に投じて夫のもとへ届くようにと祈った。

7 貞女の一念が幕府を動かし、夫は赦免

孤独な身の友右衛門はある日、釣り舟を浮かべて釣り糸を垂れていた。そこに小さな竹筒が流れて来て舟に近づくので、何度も押しやった。いくら避けても寄せてくるので、奇異を感じ、拾い上げてみた。そして中を開けてみると、妻菊女の手紙と法華経の写経の一部が入っていたのだ。友右衛門は、驚いて早速このことを島の役人に申し出た。

報告を受けた上司も感激して、更に幕府に上申したところ、貞女の一念に幕府も深く感銘し、節婦の殊勝な行跡に免じて、友右衛門を赦免した。

8 年間の流囚の苦難の生活を許されて、なつかしの故郷大浜に着いたのは、享保 11 年（1726）宗心の亡くなったその年の 12 月であった。

8 報恩と画趣の生活を送った安らかな晩年

再び静かな家庭生活に戻った友右衛門夫婦にとっては、余生ともいえる慎み深い暮らしが始まった。しかし、享保 13 年（1728）に友右衛門の母が、翌 14 年（1729）には父泰栄が相ついで亡くなった。その後、松次郎と娘糸が生まれた。子どもの成長につれ、喜びと心温かさにあふれた晩年を過ごしていった。菊女も亀久の署名を使うようになる。また、名古屋から実家の母を迎えて孝養を尽くし仕えた。

常に神仏の慈悲を信じ、参拝と写経により夫が帰られたことは、神恩と深く感謝し、その後も写経を続け、これを寺々に納経した。（今も菊女の奉納写経が林泉寺、妙福寺、貞照院、称名寺、宝珠寺等に保存されている）

また、優れた画才によって三十六歌仙の像並びにその和歌を手筆し、熊野神社、稲荷社、大浜熊野大神社にそれぞれ真心をこめて奉納した。

9 後世に美談を遺す

夫は宝暦 8 年（1758）、66 歳で、菊女は安永 2 年（1773）、70 歳でこの世を去ったが、宿命の過去から後世に美談を遺した。菊女は学童のかがみとして婦徳顕彰するために全碧海郡の学校に呼びかけ、47 校、2 万 6 千人から浄財が集められた。その浄財によって大正 10 年（1921）8 月大浜熊野大神社の境内に、菊女の碑が建てられた。題字は時の愛知県知事宮尾舜治、碑文は碧海郡長豊田幾次郎によって完成した。

また、菊女の墓は宝珠寺境内にある。

◆もっと知りたいなら

・『貞婦菊女と法華経』（昭 59 妙法堂）

・『貞婦 加藤菊女』

（昭 54 碧南市文化財第 3 集）

7 信念の人、他力本願を究めた宗教哲学者

きよざわまんし
清 沢 満 之
(1863～1903／大浜)



1 神童と呼ばれた秀才の少年

清沢満之は、文久3年（1863）名古屋黒門町に父徳永永則、母タキの長男として生まれた。幼名は満之助と言った。身分の低い士族で、母は熱心な真宗の信者であった。家は貧しく、妹が生まれたために2歳まで祖母マツの家で養育された。

明治5年（1872）、第五義校（現 名古屋市立筒井小学校）に9歳で入学、11歳で卒業すると、愛知外国語学校に入学した。英語と数学が得意で、教授の英国人が演説に行くとき、通訳として連れていかれたくらい頭脳の鋭利と実直な態度で知られた。学校が廃校になり、明治10年（1877）、父の勧めで愛知県医学校に入学、家計の窮乏により、退学した。しかし、四書五経を習い、近隣の子供に英語を教えた。

2 東京大学予備門に入学

尾張の龍華空音を介し、近所の覚音寺、小川空恵らから「京都の本山が新しい育英事業を創め、寺門の子弟から格別の英才を募り、給費で学問させようとしている」と告げられ、母の勧めもあり、明治11年（1878）、東本願寺育英教校に入学した。25名の入学者の中でも満之は飛び抜けて優秀だった。休み時間にも三部経を読み、真面目な満之に対して「ビショップ（司教）」というあだ名が敬意を込め付けられた。

明治14年（1881）、育英校を廃し、英才を東京へ派遣しようということになり、満之は他の2人と共に東京大学予備門第二級生の編入試験を受け、1位で合格した。

3 首席の東大時代、宗教界に入る決意をする

物理学に関心を寄せるようになったが、本願寺の給費生であるため明治16年（1883）、20歳で東京大学文学部哲学科に入学した。哲学教授のフェノロサからヘーゲル哲学を学び、満之の宗教哲学の基礎が作られた。成績は常に首席を占め、尊敬された。24歳で卒業し、明治20年（1887）大学院に進んだ。傍ら第一高等学校でフランス史を教えたり、「哲学館」で心理学、論理学、純正哲学を講義した。一高の給料だけで40円あり、名古屋から両親を呼び、本郷に居を構えた。前途洋々の船出であった。

学者の道に進めば著名な学者になったはずであったが、「本山から学問をさせてもらって、今日に至った。恩を尽くさねば」と、宗教界に生きる決心をした。

4 25歳で中学校長に、満之の人生で唯一華やかな時期

明治21年（1888）、25歳で京都府立尋常中学校（後の京都府立洛北高等学校）の校長として赴任した。同年、大浜の西方寺の娘清沢やすと結婚した。満之をつなぎ止めておきたい宗門と、優秀な僧侶の養子を探していた西方寺との話し合いで進展したのだ。百円の高給（京都でも数える位）を取り、山高帽にフロックコート、口髭を蓄え、西洋たばこをくゆらせ、迎えの人力車で通勤した。満之の人生で唯一の華やかな時期であった。

5 生活を一変、禁欲生活

28歳のとき、大いに感ずるところあり、校長を友人に譲り、生活を一変させた。洋服も全て人にやり、妻子を故郷に帰し、頭を丸め、木綿の白衣に黒衣墨袈裟を着て、京の人々を驚かした。翌年母が亡くなり、忌中の精進からますます禁欲生活が激しくなり、ついには塩を断ち、煮炊きをやめ、そば粉を水で混ぜた物や松ヤニをなめて三食をすませた。人が生きるためのぎりぎりの可能性を実験する猛烈な禁欲生活であり、号を「骸骨」と名乗った。真宗大学寮で『宗教哲学骸骨』（英訳されシカゴの万国宗教会議で好評を得る）を講じ始めた頃である。

6 宗門改革と養病期間

明治27年(1894)1月29日、厳如(大谷光勝)の葬儀のため、皆頭を剃って夜中の寒中立ち続けた。その後京都に風邪が流行り、満之も体を壊したが、少しも休まず働いた。後に結核と診断され、友人の強い要請から垂水(現神戸市)で養生した。

当時の東本願寺の金権体質に、満之らは、学校改革と同時に教界時言社を設立して寺務改革に取り組んだ。1年足らずで満之は垂水を引き払い、病を押して動いた。暁鳥敏(あけがらすはや)らの学生も参加したが、改革はうまくいかなかった。しかし、満之はこの間死と生、自力と他力など宗教的思索を深めることが出来た。

7 西方寺に身を寄せる

明治31年(1898)、35歳の満之は西方寺に入った。位もなく、老実父を伴っていた。肺病で5尺に足らず、10貫に満たぬ貧相な満之は門徒からも受けが悪かった。説教をすれば難しいと皆帰る始末であった。輝かしい経歴は通用しなかった。

しかし、この人情の煩累は、満之の宗教的信念を確固たるものにしていった。日記「臘扇(ろうせん)記」を綴り、『阿含経』『エピクテタスの語録』『歎異抄』を読み、「自分とは何か、他力の力にまかせて、そのはからいのままに、今こうして生かされていることである。他力のおあたえを楽しもう」という悟りにも似た絶体他力の信念を確立していった。

8 上京、浩々洞の共同生活をおくり真宗大学学長になる

満之は翌年、新法主の進講のため上京せよとの命を受け、上京した。真宗大学(後の大谷大学)の東京移転にも尽力し、暁鳥らの弟子と共に本郷森川町(現東京都文京区)で自由と温かい「浩々洞」の共同生活を始めた。また、『精神界』という雑誌を発刊した。ここに満之の「精神主義運動」が展開されたのである。著名な哲学者西田幾多郎の思索にも影響を与えた。また、明治34年(1901)、満之は真宗大学の学監(学長)になり、この時期は、宗教家として最も充実した時期でもあった。

9 晩年の満之とその顕彰

明治35年(1902)、長男信一、続いて妻が死去、学長も辞任した。肺病も悪化し、西方寺に帰った。しかし、血を吐きながらも、絶筆「我が信念」を書き上げた。明治36年(1903)4月には三男も死去、6月6日未明に「(言うことは)何もない」と絶えた。

悲惨極まりない40年であったが、蒼然たる如来慈光の春に包まれ、その人生を生ききった。

暁鳥は、石川県の自坊明達寺に臘扇堂を建てた。西方寺には「信ずるは力なり」の記念碑と記念館も建てられた。毎年、西方寺で臘扇忌が営まれている。

◆もっと知りたいなら

- ・『信念の人清沢満之』(昭63 山崎正広)
 - ・『清沢満之・生涯と思想』(平16 東本願寺)
 - ・『精神主義』(平16 藤田正勝)
 - ・『清沢先生』(昭25 暁鳥敏)
 - ・『清沢先生の言行』(昭26 暁鳥敏編)
 - ・『信念の人・清沢満之』(平7 季刊誌『みどり』山崎正広)
- ※清沢満之記念館に多数有り

8 今でも碧海郡出身力士の最高位に輝く毘沙門天の生まれ変わり

きよみがたまたいち
清見 潟 又 市
(1838～1900／大浜)



1 20歳で江戸相撲に入門

相撲取りの五代目清見潟又市は、天保9年(1838)、三河国碧海郡前浜新田(現 碧南市前浜町)に生まれた。本名を榊原幸吉(後、井上姓に変わり、通称は又市)といい、実家は農家であった。

地元棚尾の玉伝という親分の元で土地相撲に参加し、三代目清見潟の弟子の目にとまった。安政5年(1858)、20歳のとき三代目のもと江戸相撲に入門した。安政7年(1860)2月、22歳で「江戸」頭書・関谷川幸吉の名で序の口につき、初めて番付にのった。当時としては年齢が高いほうだった。万延2年(1861)2月には序二段に昇進し、文久2年(1861)11月、新の海(新ノ海)と改めた。翌3年7月に下の名を幸蔵に改め、同年11月に三段目と地道に番付を上げていった。元治元年(1864)10月下の名を光蔵、慶応元年(1865)11月幸吉、同2年3月幸蔵に戻し、3年11月に幕下二段目に上がった。

2 毘沙門天のように強くなりたい

この間、師匠の三代目は隠居して、兄弟子の三代ノ松が四代目を継承、彼もその門下となった。

新幕下の場所の5日目に志貴ノ海幸蔵と改名した。これは郷里の志貴毘沙門天(妙福寺)から名づけられたもので、毘沙門天のように強くなりたいという願いが込められている。

明治2年(1869)3月「東京」頭書となり、同年11月、幕下三枚目に昇進し、菊間藩のお抱えとなり、番付頭書も「キクマ・菊間」と変わった。

3 西尾出身の深柳を抑えて、五代目清見潟又市を襲名

この年の12月、四代目清見潟が死去した。三代目より清見潟部屋を継承してからわずか6年間という短期間であった。ここで、部屋の継承争いが起こったのである。当時有資格者は、十両の深柳鉄蔵と幕下三枚目になった志貴ノ海幸蔵の2人であった。

深柳は初名を金挺(きんてい)といい、西尾の出身であった。安政4年(1857)頃、三代目清見潟の弟子になり、文久3年(1863)幕下へ昇進した。早くから西尾藩御用達の木綿問屋深谷半左衛門の庇護(ひご)を受けていた。明治2年(1869)4月幕下三枚目のとき、深谷家に因んで「深柳」と改名し、番付頭書も「西尾」となり、西尾藩お抱え力士となった。しかし、深谷家はこの当時家計が思わしくなく斜陽となっていた。

一方、志貴ノ海の故郷棚尾には、瓦屋経営の永坂奎兵衛という勢いのよい商人がいた。当店は早くから京都で優れた技術を身に付け、天明年間に初代奎兵衛は、棚尾村で瓦製造に成功し、大浜湊から各地に売り出していた。当時は四代目で隆盛を極めていた。

この後援者である永坂家の資金力と人望、人柄などから、翌場所(明治3年11月)には志貴ノ海は、正式に清見潟又市を襲名した。

4 突き押しが得意で、立ち合いに大声を発した名物力士

明治6年(1873)4月、先輩の山分(深柳が改名)の引退と交代するように、35歳で又市は新入幕を果たした。初番付から14年目であった。長身で筋肉質のがっしりとした骨太の体格で、身長6尺5寸(198cm)、体重20貫(75kg)と伝わるが、やや信憑性に欠ける。変化のある突き押し(突っ張り)を武器に、ときには無双を切ったりする取り口をした。その突っ張りの強さに相手が肋骨を折り、しばらく禁じ手にされたという話も残っている。また、立ち合いに、相撲場の外にまで聞こえるほどの大奇声を発した名物力士として知られた。

5 44歳で前頭筆頭に、47歳まで現役を続けた

その後、徐々に番付を上げていき、明治15年(1882)5月、44歳で前頭筆頭に躍進したが、これが五代目清見潟又市の最高位であった。この前頭筆頭という番付は、六代続いた清見潟の中でも、また、碧海郡出身の大相撲力士の中でも最高位にあたった。(現在でも碧海郡出身者の中では、最高位)大物には勝ち目がなかったが、大関朝日嶽を倒し、大関境川と3回引き分けている。

幕内総成績は、65勝83敗27分8預であった。成績の上では平均的な幕内力士だったが、驚異的な持久力で土俵を湧かせた。そして47歳になった明治18年(1885)5月限りで引退した。幕内在位は、13年間(計29場所)の長きにわたった。

6 帰郷すると、子ども達に思いっきりぶつからせた

引退後は年寄り専務となった。明治22年(1889)、相撲会所の名称が東京大角力協会と改称され、規則も整理され役員制度も厳格になった。その結果、清見潟は勝負検査役に抜擢された。その後勸進元(当時頼人)になったり、明治30年(1897)の役員改選時においても再選されたりしている。

郷里の生家は、清見潟の実弟梅吉が跡を継ぎ、棚尾で「福住屋」という製麺業を経営していた。巡業の合間に清見潟が帰宅すると、玄関を上がったところで蹲踞(そんきょ)の姿勢をとり、子ども達に思いっきりぶつからせたと伝わっている。

7 多くの三河出身力士を育てた

清見潟の本墓は、東京六本木の教善寺墓地に、四代目清見潟に続いてある。また、棚尾の西山共同墓地には、明治11年(1878)に清見潟が建立した両親の墓がある。

なお清見潟部屋は元来三河出身が多いが、五代目は更に多く弟子を集め隆盛した。彼は先代の養子になり榊原姓から井上姓に替わっている。地方門人の出身地は、西三河一面に及んでいる。

五代目清見潟又市は部屋を過去最大に繁盛させただけでなく、三河近辺の土地相撲の組織を大きく育成したのである。

◆もっと知りたいなら

・『清見潟又市と碧南の相撲』

(平成17年度・文化財展資料・杉浦明)

9 大坂冬・夏の陣でも戦功、七万二千石・古河城主

永井直勝 (1563～1625／大浜)



1 松平信康（徳川家康の長男）の目にとまった美少年

下総国（現 千葉県北部及び茨城県の一部）古河七万二千石の城主となった、右近大夫永井直勝は、三河一向一揆動乱の永禄6年（1563）大浜の宝珠寺で生まれた。大浜羽城を守る父長田重元の二男直勝は、幼名を伝八郎と言った。

天正4年（1576）の夏頃から三河・遠州地方に風流踊りをするのが流行した。あるとき、大浜から岡崎にかけて踊り歩いた群れの中に美しい少年がいた。岡崎城にいた舞踊を好む松平信康（家康の長男）の目にとまり、やがてこの美少年は近侍（近習・小姓）として召し出された。この美少年こそ、13歳の直勝であった。直勝は、踊りや太鼓を打つことも抜群で、読書・手習い・武芸まで歳に似合わない程器用であった。

2 困難を極めた家康の帰国（伊賀越え）を助けた直勝

3年後、信康の自刃という不運な事件（信長の命により、家康から自殺を命じられた）の後、直勝は大浜に蟄居した。武士として出発した志は、思いもよらない事件のためにくじかれてしまった。ところがその翌天正8年（1580）、直勝は家康に召し出され浜松で仕えることになった。そして30貫の地をもらい、長田改め大江氏となり、家号を永井というようになった。

その後、家康に従って京都・堺へ同行したが、天正10年（1582）6月の本能寺の変によって伊賀越えをし、伊勢の白子から船で大浜へ着いた。このとき直勝の案内で、羽城の重元の屋敷に寄って無事岡崎城に帰ったと言われている。

3 長久手の戦いで功績、三千石の知行

天正12年（1584）、21歳の若武者直勝は、長久手の戦い（家康が織田信雄と一緒にあって豊臣秀吉と争った）に出陣、49歳の敵将池田恒興（勝入）と戦いになった。馬の上から槍で突いたところ、恒興も槍で応戦し、直勝は指を落とされた。しかし直勝は、ひるまず攻め立て引き倒し、馬上から飛び降りて恒興の首をとった。その功績により家康より三河の中で千石の知行を与えられ、恒興愛用の「篠の雪」という刀をもらった。翌天正13年（1585）、直勝は更に二千石を加増され、合わせて三千石の知行を持つようになった。そして東端（現 安城市東端町）に住んだ。

4 小田原の戦いで五千石に加増、朝鮮征伐で右近大夫に任命される

天正18年（1590）4月、秀吉軍20万余は北条氏の本拠小田原城を包囲した。北条氏は3ヶ月に及ぶ籠城戦を続けた。7月5日には当主北条氏直が投降し、ここに北条早雲以来5代の戦国大名北条氏は滅亡した。49歳の家康は、この小田原討伐の論功行賞で秀吉から北条氏旧領の関東8カ国を与えられた。直勝も家康の家臣として参戦し、その戦功により家康から旧地をあらためて、相模国田倉、上総国市原、武射三郡のうちにおいて五千石をもらい、江戸に移った。

文禄元年（1592）、秀吉の朝鮮征伐の命により、家康とともに名護屋（東松浦半島突端）へ出陣。秀吉に褒められ豊氏姓を受け、従五位に叙せられ右近大夫となった。

5 大坂冬・夏の陣でも戦功

慶長 5 年（1600）9 月の関ヶ原の戦い（59 歳の家康率いる東軍と、41 歳の石田三成を中心とする西軍が美濃北部の関ヶ原で激しい戦闘をした）に直勝も出陣し、東軍の完勝により、直勝は近江野洲など二千石を加増され七千石の身分になった。

その翌年には、与力、同心を預けられ三河国碧海郡の地に四千五百石の加増となった。42 歳で書院番頭に出世した。慶長 12 年（1607）7 月には、直勝は家康について駿府城に入った。しかし慶長 17 年（1612）、30 年来連れ添った妻が亡くなった。直勝 49 歳のときであった。

慶長 19 年（1614）11 月の大坂冬の陣（73 歳の家康軍が豊臣方のいる大阪城攻撃に出陣する）、翌慶長 20 年の大坂夏の陣（徳川方が大坂城を総攻撃。豊臣秀頼とその母淀君が自害し、豊臣氏が滅亡した）には、直勝は軍奉行として、長男尚政とともに参加した。直勝は常に家康の側近にいて主の命を守り、戦いを有利に導く上で相当な働きをした。その戦功により上野國小幡に一万石を加増された。嫡男尚政も四千石を加増され、都合五千石になった。

6 七万二千石の古河城主に

元和 2 年（1616）4 月 17 日、大御所家康は 74 歳で没した。駿府にいた直勝は、江戸に上って二代将軍秀忠に仕えた。その翌年、常陸国笠間の城主となり、三万二千石の大名となった。その 10 月、妻の死の 5 年後、菩提を弔うため盛岸院の堂宇を建立した。

元和 5 年（1619）、土浦に二万石を拝領し、秀忠のお供をして京都に上った。その 2 年後には、日光東照宮奥院宝塔の造営奉行となり、立派な社殿を完成させた。その功により二万石を加増され、翌年下総国古河（現 茨城県古河市）で七万二千石の城主となった。

直勝はその 3 年後、寛永 2 年（1625）12 月 29 日、江戸で 62 歳の波乱と栄光の生涯を閉じた。長男尚政は、古河に永井寺（えいせいじ）を創建、父直勝を葬った。直勝の遺した教訓歌には「気をしずめ、いふべきことをひかえつつ、人のこころを破るべからず」「人のため、よかれと思ふ心こそ、わが身のためとなるはほどなし」がある。

7 由利姫と永井荷風など著名な子孫たち

由利姫は寺津大河内家から東端城主直勝に嫁ぎ、長男正直をもうけた。不義の疑いで離縁、根崎（現 安城市根崎町）で自殺したが、祠には陣屋の松がある。

文豪で文化勲章を受章した永井荷風は、この正直の直系である。その他能楽師の野村万作、小説家の高見順とその娘でタレント恭子がいる。

なお、小説家の三島由紀夫は古河城を継いだ直勝の長男尚政の末裔である。

8 直勝の叔父に永田徳本

外用消炎鎮痛剤で知られる会社名でお馴染みのトクホンこと「永田徳本」は、直勝の叔父であり、二代将軍秀忠の重病を治したと言われる。また、徳本は全国を行脚し、貴賤を問わず治療に当たり、医聖と呼ばれた。118 歳で下諏訪の地で亡くなったと言われ、宝珠寺には記念碑と徳本稲荷がある。

◆もっと知りたいなら

- ・『永井直勝』（昭 39 鈴木成元）
- ・『永井直勝』（平 16 季刊誌『みどり』

石川繁治）

徳本 翁

(1513? ~ 1630? / 大浜)



1 大浜に生まれ、信濃国甲斐にわたる

徳本翁は、永正 10 年（1513）頃大浜に生まれた。〔甲斐国谷村（現 山梨県）に生まれたという異説もある〕少年の頃、陸奥国で仏門に入り、鹿島（現 茨城県）〔出羽・現 山形・秋田両県の大部分という異説もある〕に行き、最初は僧残夢を師と仰ぎ修験道における神仙吐納（呼吸のこと）を学んだ。

後に月湖道人（中国からの帰化人）や田代三喜、玉鼎（ぎょくてい）らより李朱医学（当時の明からもたらされた漢方医学）を修め、甲斐（現 山梨県）に移り住んだ。

2 武田信虎、信玄の侍医になる

当時、甲斐の国主であった戦国大名武田信虎、その子武田信玄の侍医となった。諸国巡遊の中、甲斐国に最も長く滞留したことから「甲斐徳本（かいのとくほん）」とも呼ばれた。

武田家は、息子の信玄と父信虎が不仲になったため、甲斐にいたことが嫌になり、天文 10 年（1541）に信州諏訪の東堀村に移り住んだ。そして御子柴（みこしば）家に寄寓し、その娘と結婚した。

3 独自の医説、独自の処世訓をもって

当時盛んな後世家医方を学んだが、これに飽きたらず独自の医説をたて、中国後漢の張仲景（ちょうちゅうけい）の医説によるべきことを主張した。疾病は鬱滞（うったい）に起因し、多くは風寒によって発病すると説き、いわゆる汗・吐く・下・和の治療法を唱え、作用の激しい薬を用いて病気を攻撃することを主旨とした。張仲景の「傷寒論」のなかの法則は、このとき初めて日本で行われたと言える。独自の処世訓をもち、医家の風俗矯正に熱心であった。

4 薬袋を首にかけ、諸国を巡った

武田家滅亡後は、戦火を逃れて東海・関東諸国を巡り、貧しい人々に無料で薬を与えたり、安価で診療を行ったとされる。伝承によれば、徳本翁は首から「一服 18 文（一説によれば 16 文）」と書いた薬袋を提げ、青牛の背に横になって諸国を巡った。どんな治療を行っても 18 文以上は、取らなかった。また、貧者には無料で診療を行った。人々は、徳本翁のことを「18 文先生」と呼んでいた。

京都の名医曲直瀬（まなせ）道三らと往来した。そして、天正 10 年（1582）、70 歳になろうとしたとき、甲斐に帰り、甲府の横近習町（よこきんじゅまち）に住んだ。後に上一条町に移った。

5 植物学にも通じ、甲州^{ぶどう}葡萄の基礎をつくった

徳本翁は山野を巡り、薬草を採取しながら研究したため、本草学（植物学）にも精通していた。慶長 20 年（元和元年・1615）、102 歳頃にぶどうの接ぎ木、挿し木やぶどうの棚架け法などを発明して村人に教えた。そのことが、今日の甲州葡萄の

隆盛につながったと言われている。

6 将軍秀忠の大病を治す

寛永 2 年（1625）、前将軍（二代将軍）徳川秀忠は大病にかかった。多くの名医がいろいろな薬をすすめても効果がなかった。医聖徳本を推す人があり、秀忠の前に徳本翁が呼ばれた。そして徳本の処方した薬で、秀忠は見違えるように全快した。そのときも、薬代は「一服 18 文」の計算で受け取り立ち去ったと言われている。そのことによって、ますますその名を挙げた。

7 118歳の長寿を全うする

晩年は現在の岡谷市に居住し、寛永 7 年（1630）、数え年で 118 歳の長寿の末死去したと言われている。信州東堀村（現 長野県岡谷市）に墓と記念碑がある。その人生は謎と伝説に包まれている。

著書に『梅花無尽蔵』『徳本翁十九方』『医之弁』『知足斎医鈔』などがある。

8 イボ神様、永田徳本

徳本翁の墓は、今の岡谷市長地（おさち）柴宮・尼堂（あまんどう）浄苑（東堀の尼堂墓地・東堀八幡宮柴宮の裏）にある。そして、その墓は、「徳本の籃塔（らんと・かごのような塔）」と呼ばれ、その籃塔の中には沢山の石が詰まっている。今でもその石を借りていき、自分のイボをこするとイボが治るというオマジナイ的なしきたりがある。そして、イボが治ったお礼は、石の倍返しとのことだそうである。

9 名前のこと

碧南市音羽町の宝珠寺裏に徳本稲荷があり、病氣平癒を祈願する人々が今でもお参りに来ている。その稲荷社の横に、徳本翁の記念碑が建てられている。

徳本翁は、大浜羽城の長田（おさだ）重元の弟で、永井直勝（江戸城の書院番頭、後に七万二千石の古河城主）の叔父に当たると言われている。ただ、徳本の出生や系図については諸説があり、長田重元の甥、重元の孫、あるいは長田の分家の子であるなどとも言われ、「長田徳本」と書かれてある書物が多い。また、歴史の悲話により長田の長をナガと読むことから「永田徳本」とも言われるようになった。

10 「株式会社トクホン」の社名の由来

日本の製薬会社、「株式会社トクホン」（明治 34 年に「鈴木日本堂」として創業し、平成元年に現社名「トクホン」に変更した）は、「医聖」徳本翁の名前から付けられた社名である。また、「トクホン（プラスター）」という同社の消炎鎮痛プラスターの商品名でもある。

同社では、徳本翁に尊敬と感謝の念を込めて「徳本先生」と呼んでいる。

◆もっと知りたいなら

- ・『徳本翁』（『碧南市史料』第 14 輯・碧南市史編纂会 1957 年）
- ・『徳本を訪ねて』（『漢方の臨床』43 巻 5 号・大友一夫著）
- ・『徳本翁』（平 22 季刊誌『みどり』
浅井久夫）

※「永田徳本」のネット情報有り

11 高浜虚子と交流、西三河俳壇の巨匠

ひんすい
永井 寶水
(1880～1959／棚尾)



1 生い立ちと兄の影響

永井寶水は、名を四三郎と言ひ、明治13年(1880)9月、碧海郡大浜村材木屋磯貝平七の四男として生まれた。

長兄の国太郎は、24歳で棚尾小学校の校長となり、「碧潭」と号し漢詩をよくした文人で、この兄に啓発されたことが、後の俳誌「アヲミ」の刊行や碧海吟社の主幹としての文芸活動の芽生えとなった。

2 漢詩と和歌を学び、俳句を志す

四三郎は15歳で大浜小学校の教師となり、明治35年(1902)、「大浜同志の会」の結成に参加し、編集に携わった。碧潭の指導を受け「小碧」と号して漢詩を、また、熱田神宮祢宜栗田広治より和歌を学び、「久成」と号した。

明治37年(1904)、棚尾村永井嘉四郎の娘きくの婿養子に入った。明治40年(1907)、「三楽」と号し俳句の道を志して岡崎の植田石芝に学び、後東京の岡野知十の「十風舎」に入った。大正2年(1913)には、俳句界の重鎮高浜虚子に師事した。

3 俳誌「アヲミ」を創刊

大正3年(1914)、寶水1人の手で毛筆手書きや複写紙による回覧紙「アヲミ」を発行した。会員は北海道から鹿児島まで全国にわたり70余名を数えた。東北、中部、西部の三巻に分冊して回覧された。本格的な俳誌「アヲミ」の前身である。

そして謄写版刷り袋綴B5版の「アヲミ」第1号が大正10年(1921)7月1日に「碧海吟社」の主幹として寶水の手で発刊された。巻頭言で、「私等が濤荒ぶる『碧海』の一角に立って大景の一点となった時…『アヲミ』はその涙の跡です…」と寶水は言った。大正11年(1922)10月の第9号より活版刷になった。花簑らが有力な句友として、また、杉浦冷石(明治29年、西端生まれ。新川小学校の教員から新聞記者となり、文芸欄を担当し、俳句への造詣を深め、自ら俳誌「野火」や「白魚火」を創刊した)らに編集の助言を受けた。

4 全国に三河俳壇あり、高浜虚子との交流

大正11年(1922)12月20日、高浜虚子が棚尾へ来て光輪寺で句会が開かれた。そのとき虚子に揮毫を願い、それをアヲミ表紙の題字にした。また、藤井達吉が表紙絵を描き、アヲミの金看板となった。

以後、虚子を頂点として中央俳壇と太いパイプで直結した。秋桜子ら著名俳人がアヲミを訪れた。虚子は昭和3年(1928)9月29日、たけし、花簑に誘われ藤井達吉と共に棚尾への二度目の訪問をした。衣ヶ浦に十六夜の無月の舟を出し、寶水宅を訪れた。

このように碧海吟社のアヲミが、全国に三河俳壇ありとの名声を得たのは、地域文化の拠点として郷土の薫りをもった俳誌であったからである。この頃、寶水は40歳の不惑を越えあぶらの乗り切ったときであり、アヲミの名声と共に創作活動の最

盛期を迎えた。

5 辛苦の時期、藤井達吉の励ましと妻らの献身

大正末期は、賓水辛苦の時代であった。養家は義兄の借財の請け判で家屋敷を失い、実家も破産、5人の子どもの抱え進退窮まり、俳句活動も大きな壁に当たった。その後大正14年(1925)、棚尾南端に家を求め、「対矧塘居」と名づけた。ここが最盛期から晩年までの作句活動の場となり、終の棲家となった。

この間、藤井達吉はアヲミ紙上で、「今行き詰まった句作編集を開く鍵は、勇気だけである。捨て身だ、野人だ…」と励ました。ここで忘れてはならないのは、教師・保母として家計を助けた妻きくの献身と、アヲミの発行を手伝った子ども等の協力であった。

6 昭和17年まで続いた清浄無垢な俳誌「アヲミ」

昭和5年(1930)、長女の教師就職と同時に賓水は学校を退職した。昭和7年(1932)に句友でもあった長男正生(号は真小男・まさお)を肺疾患で失った。この年アヲミは、120号で休刊した。

賓水は昭和8年(1933)、53歳のとき大浜三鱗(株)に就職した。そして、昭和12年(1937)3月、アヲミを復活させた。しかし、その5年後の昭和17年(1942)、過労から脳溢血で倒れた。戦局が急を告げ、俳句誌統合により、その年11月、通巻189号をもって潔く廃刊とした。最盛期には国内外から500人余の投句があり、同人には、蔦堂、二九、荷芳、光裕、野潮、秋花、杜童、冷石、虹夢らがいた。

アヲミの同人で現在百歳を越えて活躍している秋花(岡島良平)が終刊号に一文を寄せ、「アヲミほど、清浄無垢な俳誌はない」と評している。

7 晩年の足跡、新川小学校には校歌額が

2度の地震と終戦の後も病に耐えながら賓水の俳句への情熱は続いた。昭和24年(1949)には、伝統あるホトトギス派の同人に推挙された。

この年、虚子撰のうち70句が古希記念誌として出された。翌年、碧南棚尾八柱神社境内に「初明かり吉良の横山、眉の如」の碑が立った。

また、昭和31年(1956)賓水句集が句友冷石らの尽力で出版された。現在も新川小学校体育館正面左には、賓水作詞の校歌額が掲げられている。

昭和34年(1959)11月15日、眠るが如くに往生した。享年79歳であった。昭和32年(1957)の初秋の「法師蟬、唐臼に鳴くと妻の言う」が最後の句となった。そして、永井家の一室には、今でも虚子、賓水ら36人の句をおさめた三十六句の句屏風が置かれてあり、質の高い文化の薫りと風情を漂わせている。

◆もっと知りたいなら

・『賓水の文芸活動の奇蹟』(永井千秋)

・『永井賓水』(平20季刊誌『みどり』)

石川繁治)

12 壱兵衛鬼瓦を芸術品に高め、学問を愛し続けた瓦師

永坂 壱兵衛 (六代目茂三郎) (1873~1966／棚尾)



1 瓦師、永坂壱兵衛家の六代目に生まれる

六代目永坂壱兵衛こと茂三郎は、明治6年(1873)に父正勝、母八重の間に生まれた。茂三郎は、明治10年(1877)11月、妙福寺(毘沙門さん)境内にあった棚尾学校(同学校には、8つ後輩に藤井達吉、7つ後輩に平岩種治郎がいた)に入学し、明治16年(1883)年に卒業した。棚尾学校在学中、妙福寺住職の佐野良契に見出され師事した。

瓦屋として七代続いた(昭和19年に休業、その後「瓦屋壱兵衛」の暖簾は生きていて瓦販売業を再開し、昭和33年頃まで続いた。七代目利貞は、昭和31年から碧南市議になり、四期務めた)永坂家の中で、家業を隆盛させたことはむろんだが、向学心に燃え、文人として教養人でもあった六代目壱兵衛を中心に上げることにした。

2 碧南の瓦産業と永坂壱兵衛家の瓦作り

現在の碧南市の製瓦業は、地場産業三州瓦の中心として重要な地位を占めている。この三州瓦の基礎を築いたのが、棚尾の永坂壱兵衛家である。永坂家は、代々壱兵衛を襲名している。二代目壱兵衛は江戸時代の中頃、京都に赴き7年間造瓦法を学び、帰国して天明8年(1788)に瓦屋を本格的に開業した。その後6代にわたって棚尾の地で、瓦を作り続けてきた。そのため、この地には壱兵衛作の瓦が多く残されている。屋根を彩る鬼瓦は威厳もあり、長い歴史と伝統に支えられた装飾性豊かで実用的な文化財である。

3 12歳で京都に遊学、多方面の学問を学ぶ

茂三郎は、棚尾学校卒業後の明治17年(1884)、12歳のとき、京都浄土宗西山深草派総本山誓願寺の山本観純に伴われて京都へ遊学し、誓願寺に起居した。

翌18年、祖父嘉平治(四代目壱兵衛)重病の報に、急きよ帰郷した。祖父の病は重く、茂三郎の母八重は必死の看病をするが、その疲れから母は倒れ、8月帰らぬ人となった。そして、12月には祖父も亡くなった。

茂三郎は、14歳にして祖父と母を一時に失い大変力を落とした。しかし、気を取り直した茂三郎は、再び京都へ赴いた。

茂三郎は京都において、ときの名士を訪ねていろいろ学んでいる。その名を挙げれば、西尾為忠(儒学)、宇田淵(儒学)、谷鉄臣(漢学・蘭学)、中村確堂(漢学)、市村水香(漢学)、斎藤聞精(仏教)など、多方面の学問を学んだことが分かる。

明治20年(1887)3月には、京都尚寧学校に入学し、英学を学んだ。翌21年(1888)9月、同志社普通学校2年に編入学した。

4 帰郷するも、抑えがたし向学心

明治25年(1892)1月には、同志社の寮に移り、同年6月、19歳で同校を卒業した。なお、茂三郎は普通学校卒業の少し前、父に大学選科入学の許しを請うたが、許されなかった。

普通学校を卒業した茂三郎は、同志社の寮を出て、下宿を始めた。京都簿記専門

学校に入学するためであった。しかし、7月24日帰郷の途についているので、その志は果たされなかったようである。

茂三郎は明治25年(1892)7月25日棚尾村の自宅に帰った。翌日妙福寺を訪問し、住職の良契へ帰郷の報告をした。茂三郎は、同年8月2日の日記に、

「此レ余ガ実業ニ従事スル第一ノ日ニテアリキ。午前ハゼボン氏ノ論理学ヲ讀ミ、午後鬼板ヲ造ル稽古ヲ始ム。此レヨリハ、午前讀書シ、午後家業ニ掛ルコトト定メタリ」と記している。瓦職人としての定められた道を歩むべく郷里に帰ってきた19歳の茂三郎ではあったが、学問に対する情熱は一向に衰えていなかった。

5 学問への希求と家業継承の相克

11月になると、法学の通信教育を始め、明治法律学校講法会会員となった。茂三郎帰郷後、永坂家を多くの青年たちが訪れるようになった。日記に見られる名前を挙げると、杉浦玉吉、石川吉次、斉藤和太郎、石川安松、磯貝弥一郎、永井治郎、平岩種治郎、石川八郎治などがいた。

京都に学んだ憧れの同輩・先輩として棚尾の向学に燃える蒼々たる若者らが集まった。瓦屋という同業の者だけではなく、いろんな分野の青年たちが、空腹に飢えた獅子のごとく茂三郎の下に集まったのである。まるで幕末、改革に燃えた志士たちが新しいことを学ぼうと吉田松陰の下に集まった松下村塾のようでもあった。

きっと茂三郎は、学問を究めたいという純粋な願望と、瓦師永坂家の長男として家業を継がねばならないという責任感との相克に悩む日々を送ったことであろう。

6 10歳歳上の清沢満之との交流

明治26年(1893)1月4日、20歳になった茂三郎は、10歳歳上の清沢満之に会うため、大浜の西方寺を訪れた。日記には、

「午後、徳永(清沢満之)氏帰国ニ付キ、氏ヲ西方寺ニ訪ヒ、客年加茂兄ヲ氏ニ紹介セシニ付テ氏ニ謝ス。談話四時ニ至ル。氏ハ小軀、然レドモ常ニ微笑ヲ含ンデ對話ナシ、談実業ノ事ニ及ブ。氏曰ク、実業家ハ尤モ広告ヲ必要トスト。談又タ氏ノ僻ナル厭世主義ニ及ブ」とある。

この頃は、満之の『宗教哲学骸骨』の英訳がシカゴ万国宗教大会に於いて好評を博していたときであった。難解な満之の哲学に対して、仏教に関心が深かった茂三郎ではあったが、満之の思想を「厭世主義」と捉えていた点が面白く、興味深い。

7 文人としての刊行物を次々に出版した晩年

茂三郎は家業にも精を出し、長男としての責任をよく果たした。明治27年(1894)、藤澤山清浄光寺(遊行寺・ゆぎょうじ)の瓦受注に際しても交渉に当たった。茂三郎は新しい瓦製造の技術を導入して、質を向上させ、生産額を伸ばした。また、その後棚尾村の村政にも関与した。29歳で収入役に選任され、明治40年(1907)には棚尾村村会議員になり、以後七期にわたり昭和9年(1934)まで務めている。大正13年(1924)に全国瓦業組合連合会が創立され、茂三郎は監事に就任した。

昭和20年(1945)72歳のとき、宇宙の基本原理を漢詩にまとめた『江村自叙伝』を出版した。それ以後『江村詩集』『江村百題』『江村五絶』『江村七絶』『古今名吟抄と随筆』などを次々と刊行した。

茂三郎は昭和33年(1958)、瓦業としての
奎兵衛家の廃業を見届けた後、昭和41年
(1966)、93歳でこの世を去った。

◆もっと知りたいなら

・『文化財展 永坂奎兵衛の瓦』資料

(平18 杉浦明)

平 岩 種 治 郎
(1880～1952／棚尾)



1 おいたちと人柄

明治維新により封建的な拘束が撤廃され、民間企業の興隆が始まった明治 13 年 (1880)、鍛冶屋平岩幸左衛門の長男として種治郎は棚尾村字東川 (現 碧南市棚尾本町) に生まれた。

平岩家は、初代幸七 (1784 ～ 1849) が文化 5 年 (1808)、24 歳のときに鍛冶屋を創業し、種治郎で 5 代目である。父幸左衛門は典型的な火造り鍛冶屋で、村では「鍛冶幸」と呼ばれていた。性格は気短だが、気っぷがよく、質素で物を大事にし、信心深い人であった。

2 先輩に六代目永坂^{ちくべえ}奎兵衛、友人に藤井達吉が

種治郎が入った棚尾学校は、妙福寺 (毘沙門さん) にあり、1 つ年下に総合芸術家となった藤井達吉がいた。小学校の 4 年間種治郎と達吉は友達としてよく遊んだ。友を選ぶなら「学者か知者を選び、悪人は遠ざけよ」との父の教えにより、同郷の先輩で同志社に学び漢詩に通じたインテリ瓦師六代目永坂奎兵衛のもとで英語を習った。また、学校を終わってから妙福寺のお手伝いをし、住職からもお茶の作法や囲碁を会得した。このことが後の人間形成に役立った。

種治郎は若い頃、村の人達から「ゴミだめに鶴が舞い降りた」と噂されたほどで、緻密な頭脳で、人の意見をよく聞き、ことにあたっては用意周到、しかも先見性があった。

3 鍛冶幸から平岩鉄工所へ

とにかく機械いじりが好きであった種治郎は、12 歳で父の工場に入り、農機具、船くぎを作った。そして父を助け、手回し式の旋盤を導入した。

近代産業が芽吹き始めた明治 30 年 (1897)、石油ガス発動機を製造し、知多郡の機屋へ納入し、この地方の産業改革に一役果たした。

鍛冶幸から「平岩鉄工所」となり、種治郎の努力により明治末には職人 25 人、年生産額 2 万 5 千円の中堅工場となった。

4 国産初、目を見張るでき栄えの毛織機を発明

大正 3 年 (1914)、亀崎の竹内昇亀から四幅毛織機製造の依頼があった。戦争で外国からの毛織機が途絶えた今こそ国産化のチャンスであると考え、大阪からジョージ・ホジソン式の織機を借り、解体、研究し国産毛織機の製作に挑んだ。その後、更に改良を加えるため、ドイツ製のションヘル式織機を借りて、日本人女工に合い、能率のよい純日本式の毛織機を完成させた。ときに大正 5 年 (1916) 3 月であった。

その後も改良を続け、翌大正 6 年 10 月、亀崎の竹内工場で、経て 60 双糸、緯 53 単糸の紺サージ地の試し織りをした。運転は円滑で綾目も申し分なく、専門家や機業界が目を見張るでき映えであった。

すぐに 124 台もの注文がまとまり、織り上がった製品は、大阪の毛織り輸入商社最大の芝川商店が買い取る契約も結ばれた。

5 日本の毛織物工業の飛躍的發展に貢献した平岩製織機

平岩製の国産四幅毛織機は、当時 1 台 1600 円で一宮を中心にした尾西地方や岐阜・大阪方面の機屋に設置された。

その後も改良が続けられ、昭和 24 年（1949）には回転数毎分 124 回の高速毛織機が完成した。

平岩製毛織機は、我が国を代表する毛織工場である日本毛織、東洋紡績、東亜紡績等にも納められ、日本の毛織物工業の飛躍的發展に貢献した。また、有名ブランドの御幸テックス、長大テックスを生んだ。その結果、毛織機製造の国内シェアは 75 %にもなった。

更に、アメリカやソ連、東南アジア、中近東、アフリカ等 22 カ国へ輸出されている。

6 平岩鉄工所青年学校を開設

種治郎は推されて、昭和 5 年棚尾町会議員に当選、昭和 13 年（1938）には学務委員となった。その翌年、従業員の知識技能の向上が、新しい機械製造の基盤を作ると考え、平岩鉄工所青年学校を開設、校長に就任。青少年の教育にあたった。ここで学んだ人達によって西三河南部の鉄工業が発展した。

7 三笠宮殿下のご来臨、地域の経済界の中心に

戦後ようやく産業界が明るさを取り戻し始めた昭和 24 年（1949）に碧南商工会議所が設立され、初代の会頭となった。その子慶一も第三代会頭に就任し、平岩家はこの地方の経済界の重鎮となった。（平成 22 年、慶一の子、統一郎も会頭に就任）昭和 25 年（1950）に株式会社となり、従業員は一時 350 人余にもなった。

またその年の 5 月、三笠宮崇仁親王殿下が平岩鉄工所に来臨された。当時 72 歳になっていた種治郎だが、息子 34 歳の慶一は後にそのときの心境を「私は父と共に工場のご案内をさせていただいた。光栄ではあったが、とても緊張した一日であった」と述べている。

8 地域にも貢献

種治郎は戦時中、軍からの会社合併を断ったり、三河地震のあと警察からお宮の木を切っても早く復旧せよとの話を断った信念の人でもある。

また、町づくりにも協力し、大正 13 年（1924）の棚尾町発足に際し、毘沙門天の南に 70 尺（約 21 メートル）の火の見櫓と棚尾小学校にバッキンガム宮殿の門を模した門扉を寄贈した。これらは実に見事な出来で、戦時中の供出も免れ、今も残されている。

このように国産第一号の毛織機の発明者として、また、地域産業の発展と地域文化の発展に大きな貢献を残し、昭和 27 年（1952）10 月、72 年の生涯を閉じた。

◆もっと知りたいなら

- ・『平岩種治郎』（平 13 季刊誌『みどり』石川繁治）
- ・『碧南の風』（平 13 平岩慶一）

14 生きることは芸術なり、
碧南に生まれた孤高の芸術家

藤 井 達 吉
(1881～1964／棚尾)



1 針吉、凧吉と呼ばれた少年時代

藤井達吉は、明治14年(1881)6月6日、碧海郡棚尾村字源氏(現 碧南市源氏町)に米屋、藤井忠三郎の三男として生まれた。学校は妙福寺(毘沙門さん)にあり、達吉は勉強もよくしたが、腕白で腕っ節が強く勇ましい少年であった。図画・工作が好きで、着物を縫い上げる程の腕前で、凧に描いた絵もうまかった。

2 七宝店に就職

小学校を卒業すると、11歳で知多郡の木綿問屋に丁稚奉公に出た。その後兄の雑貨商を手伝ったりした。芸術への志が芽生え「美術学校に行きたい」と親に頼んだ。父に反対されたが、母は達吉の才能を考え、名古屋の服部七宝店に就職させた。

3 芸術家へのふくらむ決意

明治37年(1904)、達吉は米国セントルイス万国博に七宝焼き出品のため渡米した。ボストン美術館にも出かけ、美術におけるデッサンの重要性を知った。

帰国した24歳の達吉はすぐに上京し、兄と七宝の事業をやったが失敗、兄は失踪、父の商売もうまくいかず、親子6人と2人の姪との貧しい東京生活を始めた。自然や世の中の全てが学校であり、先生であると考え、幅広い勉強をした。達吉は、高村光太郎が出した美術店に、与謝野鉄幹・晶子の短冊と共に出品した。作品も少しずつ売れ出したが、貧乏な生活はしばらく続いた。

4 中央美術界で存在をあらわす

達吉の作品を気に入ったという一人の紳士(岸田劉生や富本謙吉のパトロンであった芝川照吉)が家を訪れ、金一封を置いていった。このように達吉の美を深く求める純粋な気持ちや才能が徐々に認められるようになっていった。一流の芸術家との交流をはじめ、銅版画家のバーナード・リーチに学んだり、陶芸も学び出した。

大正元年(1912)、美術集団「ヒュウザン会」や「国民美術協会」が創立されたときには、ただ一人の工芸家として参加したりした。大正8年(1919)38歳のとき、「装飾美術家協会」を作ったり、日本美術院に出品して入選し、院友になった。

5 純粋な芸術家としての新たな道を選択

大正7年(1918)、達吉は仲間と共に「文展」の中に工芸部門を入れるように働きかけた。翌年「帝展」と改称されたが、すぐには達吉の願いは入れられなかった。このとき、達吉への中傷や攻撃がなされた。傷ついた達吉は、この運動から一切手を引き、だれからも縛られない自由な総合芸術家への道を選んだ。

6 日本のデザイン革命の先鋒者

大正半ばからは、芸術を生活に結びつけるために啓発的な活動を始めた。家庭工

芸の制作法を「主婦の友」に紹介したり、講師を行ったりした。また、白木屋百貨店図案部の顧問として、商品デザインをした。そして昭和4年(1929)48歳のときから12年間帝国美術学校(現 武蔵野美術大学)の図案工芸科の教授を務めた。

7 瀬戸の陶芸家に大きな影響

昭和2年(1927)、46歳のとき瀬戸に滞在した。達吉は、「自分で文様は写生しなさい」「ロクロは自分でひけ」「窯は自分で焼け」と強く指導した。芸術としての陶芸を教えたのだ。その教えは、鈴木八郎や栗木伎茶夫(ぎさお)などの優秀な陶芸家を生み出した。「物は永遠の力なり」という信念を持ち、一流や本物を求めた。

8 強い郷土愛

大正15年(1926)、碧南国民学校(現 碧南高等学校)に窯業科を新設し、郷土工芸を興そうとした。しかし、猛反対にあい、故郷に失望する。ただ、そんな故郷でも棚尾の平岩幸左衛門の恩に報いようと、寿像を建てようとした弟子達に感動したり、昭和8年(1933)、不慮の火災にあった母校棚尾小学校の新校舎完成に際して作品を贈ったりした。古里に失望を繰り返すも、郷土を愛する気持ちは持ち続けた。

9 小原で優秀な和紙工芸作家を育てる

昭和10年(1935)、達吉は東京大井町から神奈川県真鶴に転居した。その頃から永井實水主宰の俳誌「アヲミ」に随筆や表紙絵を投稿した。また、和紙色紙を皇太后が買われたり、内親王のご成婚のお祝い品として、六曲一双の屏風を献上した。

昭和20年(1945)、太平洋戦争の成り行きが悪化し、陸軍参謀総長の杉山元帥の進言もあり、小原村に疎開した。そこでは若い村人たちに和紙に付加価値をつけた和紙工芸を教えた。鳥屋平(とやがひら)に住み、「小原総合芸術研究会」を作ったり、「小原農村美術館」を造ったりした。加納俊治や山内一生など多くの著名な和紙工芸作家を育てた。人間教育を厳しく指導し、礼儀正しく律儀で情に厚かった。

10 ふるさと再び、道場山の生活

69歳になった達吉は体を壊し、棚尾の長田秀吉らの勧めで新川の道場山に移った。旧知や地元の人達とも気軽に接した。この期にあっても制作意欲や未来を予見する鋭い見識(拝金主義、物質文明や大量消費社会への憂いなど)はさえていた。しかし、碧南に美術館を造り、自分の作品を寄贈する夢は遂げられなかった。

昭和31年(1956)、5年少々の古里での生活にも、「古里の六とせの旅も夢とすぎ老いはらからは何処へ行くらむ」と詠み、老いてなお、流浪の旅に出た。

11 旅の一生

達吉は、四国遍路に度々出かけた。道場山を去り、沼津、岡崎市岩津、湯河原、岡崎戸崎町と、転々と住まいを変えた。達吉の一生を象徴しているような晩年であった。また、独身を通し、芸術一筋の人生でもあった。

昭和39年(1964)、岡崎市民病院にて故郷で育った鶏頭の花を眺めながら83歳で亡くなった。生涯古里を忘れず、自然を愛した達吉のふさわしい最期であった。

◆もっと知りたいなら

・『藤井達吉物語』

(平18市史料別巻3 浅井久夫)

・『藤井達吉先生』(昭50 中根仙吉)

・『藤井達吉の生涯』(昭49 山田光春)

・『旅人われは 小説・藤井達吉』

(昭60 桑原恭子)

※その他多数有り

平 岩 千 代 治
(1921～1975／日進)



1 秀才少年

平岩千代治は、現在の碧南市東浦町に父五代目七之助、母かつのの長男として大正10年（1921）6月8日に生まれた。

平岩家は、天保8年（1837）、「七之助商店」として創業した老舗の造り酒屋であった。現在では八重酒造味淋株式会社となっている。

千代治の子どもの頃は、蔵人がたくさんいた造り酒屋で、裕福な家庭であった。千代治は幼いときから物覚えがよく、いたずらもしなかったのも、親が「叱る」ことも、「勉強しなさい」ということもない、世話のかからない子どもであった。

千代治は地元の旭村立日進尋常小学校を卒業し、昭和14年（1939）年3月に、飛び抜けて優秀な成績で、愛知県立刈谷中学校（旧制）を卒業した。

2 48倍の難関校、海軍経理学校に入学、首席で卒業

千代治は、当時優秀な生徒が集まる海軍経理学校を志願した。48倍の志願者の中から、難しい試験を突破し、昭和14年（1939）12月、希望の海軍経理学校に入学した。海軍経理学校は、当時の若者があこがれる7つ釦の軍服が制服であるエリート校であった。

昭和17年（1942）11月、千代治は海軍経理学校を首席で卒業した。首席で卒業する生徒は、当時最大の榮譽である天皇陛下から短剣を賜うことができた。

3 海軍のエリートコースを進む

海軍経理学校を卒業後、同年戦艦伊勢、翌昭和18年（1943）には、連合艦隊旗艦（艦隊の司令長官・司令官の乗っている軍艦）大和に、翌昭和19年（1944）に海の飛行場と言われた最新鋭航空母艦大鳳に乗艦勤務した。これは、海軍のエリートコースであった。

4 人間味あふれる海軍教官

その後、千代治は母校海軍経理学校の教官として勤務した。軍国主義時代の中で、千代治は人間を大切にすることをした。一例をあげると、軍隊では、精神教育の名のもとに鉄拳制裁が常識となっていたのに、千代治は生徒に手を出さなかった。

また、精神力を高めるといって、夜中に臨時に生徒を集める教官がいる中で、彼の場合は逆に生徒が訓練で疲労しているときは、普段より1時間くらい起床を遅らせることが度々あった。

その後、多くの卒業生が千代治を慕った。戦後、政財界で活躍した、元大分県知事平松守彦、元地方港湾審議会会長藤井隆（名古屋大学名誉教授）などは、その代表である。

5 日本興業銀行、日本瓦斯化学から日本スチレンペーパーを設立

戦後、千代治は一橋大学を優秀な成績で卒業し、日本興業銀行に入行した。その後、海軍の先輩の榎本隆一郎に誘われて、榎本が設立した日本瓦斯化学に入社した。

昭和 36 年 (1961)、千代治は管理部次長として訪米した。そこで、サンケミカル社の技術導入をし、その技術を生かした会社の設立構想を立てた。そして、日本スチレンペーパー (現 JSP) を、榎本 (社長) と共に設立した。千代治は 40 歳で新会社の総務部長に就任した。

6 先を見る経営者

当初、会社は赤字続きであったが、これを千代治がうまく黒字化した。昭和 45 年 (1970)、千代治は専務取締役になり経営の中核を担うようになった。栃木県鹿沼市の用地を買収し、工場を設立して事業拡大をした。さらに昭和 47 年 (1972)、事務合理化のために、いち早くコンピュータを導入した。

7 ベンチャー企業の走り

昭和 50 年 (1975)、千代治は日清どん兵衛などのドンブリ容器を生産する日本ザンパック (株) を設立した。この会社は日本スチレンペーパーの子会社で、日清どん兵衛の売り上げ向上を受けて、会社の利益は増加していった。千代治の経営のやり方は、日本ザンパック (株) のように、一つの製品が開発されると、それを生産する会社を設立し、そしてその会社を育成した。今でいうベンチャー企業の走りであったとも言えよう。

8 高機能発泡樹脂で、流通や安全の強化に影響

千代治は今日、スーパーマーケットなどで見られる刺身トレーやプリンスメロンの緩衝包装材ミラネットなどの普及を推進し、商売や輸送方法に大きな影響を与えた。

ところが昭和 50 年 (1975)、千代治は 54 歳の若さで交通事故の後遺症のため急逝した。千代治が計画した世界で初めての耐熱・強度のポリプロピレンは、死後まもなく完成し、自動車のバンパーの芯材などとして今日多く使用されている。

9 昭和の三河武士

千代治はいつも目標に向かって真剣で前向きに進んできた。実業界に入ってから会社一筋に命をかけた。朝早くから夜遅くまで会社のために働くので、休日は翌日からの仕事のために家庭でモーツァルトなどを聴き、英気を養った。

千代治は、他人に対して温厚で、説得力ある話し方をした。子ども達は、叱られた記憶がないと話している。また実直な人柄で、自分で企画し、責任をもってそれを実行した。教え子の一人藤井は、「昭和の三河武士」と語っている。しかもその目的は自分のためにではなく、会社や国のためにであった。戦中と戦後では、千代治の仕事は 180 度違うように見えるが、実は軍人として企業人として、常に「国家社会のため」という一貫した信念が流れていたのである。

千代治は上の者がいばる軍国時代でも謙虚で奢りがなかった。また、実業界時代には石油ショックで会社が危機になったときに、病気でありながら、危機をはねのける強い精神力をもっていた。千代治には、「真のリーダー」という言葉がよく合うように思われる。

◆もっと知りたいなら

・『平岩千代治の話』

(平 17 市史料別巻 2 水野利亮)

・『平岩千代治』

(平 17 季刊誌「みどり」水野利亮)

しん てん おう
山 中 信 天 翁
(1822～1885／日進)



1 勉学に励んだ少年時代

山中信天翁は、文政5年（1822）、今の碧南市東浦町に山中子敏の二男として生まれた。（長男は夭折。号は信天翁・静逸、字は子文、諱は猷・まつる）

家は沼津藩主の御用達を務める大地主であった。少年の頃、大坂に出て経書や歴史を学んだ。帰郷後も自らに厳しい日課を課し、日々勉学に励んだ。

2 近代国家樹立をめざして

安政元年（1854）、同じく大坂で緒方洪庵の適塾に学んでいた弟猷（ゆう）が急に亡くなった。憂国の思いが強かった弟の遺志を継ごうと家をもう一人の弟に譲り、伊勢に学んだ後、京都に行った。

そこで勤王の志士や公卿とも交わり、国を憂い、国政を論じた。封建制度を廃止し、天皇を中心とする四民平等の近代国家樹立が、日本の行く道であるとの思いを一段と強めた。

3 知と財をもって

「安政の大獄」（1858）に始まり、「桜田門外の変」（1860）や、「八月十八日の変」（1863）で、尊皇攘夷派が京都から追放されるなど政局の混迷は続いた。

「池田屋騒動」（1864）に見るように、勤王の志士の多くは、佐幕派によって暗殺された。

一方信天翁は、京都郊外の修学院村に移り住み、時運の来るのを待った。都から一步退くことで、大局が眺められ、冷静な目と判断力を持つことができたのである。血気にはやる武士とは一線を画し、文人としての知と、素封家としての財をもって勤王の志士を支えた。

その信天翁の陰の動きが、洛北に閉居謹慎中の岩倉具視の知るところとなったのである。

4 岩倉具視の懐刀として

慶応3年（1867）1月、明治天皇が即位した。朝廷の空気は一変し、尊攘派の公卿の赦免が行われた。以後天皇が若年であったため、側近の岩倉具視が維新改革の主役となった。その岩倉具視の懐刀として信天翁は、維新政令の草案の多くを作成した。

「鳥羽伏見の戦」（1868）では、食糧や軍事費の調達の任につき、功労をあげた。その年、初代会計官・駅逋司（えきていし）知事（後の郵政大臣の職）に任ぜられた。また、明治天皇の東京遷都の行幸では、御用掛を仰せつけられた。産業や労働に精を出す人を顕彰したり、災害で難儀をしている人を救済することなど、国民を思いやる政策を建言した。

その年従五位に叙せられ、翌年には桃生（ものう）県知事に就いた。

5 謙譲の三河人氣質

桃生県はまもなく隣接県に合併され、その（今の宮城県）知事に任ぜられた。そのため前任者が退職を余儀なくされ、心を痛めた信天翁は、すぐに辞任を申し出た。しかし、一旦お預けとなった。

明治3年（1870）の岩倉具視、大久保利通、木戸孝允、大隈重信、伊藤博文、山中信天翁などが集まった御前会議の席で、信天翁は再度辞表を提出した。そこで信天翁の願いは、ようやく聞き入れ許された。このことは、信天翁の廉潔な人格と謙譲を美德とする三河人氣質をよく表していると言える。

6 京都に隠棲

その後信天翁は、伏見宮と閑院宮、北白川宮の家令職を兼務することになった。しかし、それも4年で辞し、明治6年（1873）9月、同志として闘った勤王の志士たちが中央の政界で活躍する中、51歳ですべての官職から退き、京都に隠棲した。

7 政治家としての文人

京都下鴨の^{ただ}糺の森に居を構え、風雅な生活を送った。近代日本画壇の巨匠富岡鉄斎は、信天翁を兄と慕い、教を乞うたという。山紫水明を描いた水墨画や書は、豪放な中にみなぎる熱情がほとばしっている。

信天翁は純粋な芸術家というよりは、儒学に基づく政治家としての一面をもった文人であった。

宗教心が厚く、儉約に努め、正直で高潔な人格であった。このように詩歌や茶華道にも通じたが、ただ風流の道を究めるだけではなく、時々岩倉に国政に関する上申をした。

8 嵯峨に對嵐山房を築く

明治10年（1877）には嵯峨に「對嵐山房」を築いた。その年行幸の折、信天翁はその山房において明治天皇の尊顔を拝するという栄に浴し、天皇より金品を拝受した。また、自分の没後この山房が世人に渡り、聖蹟を汚されることを恐れ、宮内省に献納を申し出ようと上京した。

しかし、その途中病に倒れ、願いを果たすことなく明治18年（1885）、64歳の生涯を閉じた。貞照院（現 碧南市霞浦町）に墓碑が建てられ、正五位を受けた。大正2年（1913）には、従四位を授けられた。

信天翁は国を思い偉業を成し遂げた。しかし、私欲を捨て、自ら歴史の表舞台を去った。この陰徳を重んずる姿こそ三河人らしいのである。

◆もっと知りたいなら

- ・『信天翁』（大正4信天會）
- ・『山中信天翁没後百年記念目録』（昭60碧南市教育委員会）
- ・『山中信天翁遺墨集』（昭56碧南市教育委員会）
- ・『山中信天翁』（平21季刊誌『みどり』浅井久夫）

17 東海初の洋式医学校を開設、地域医療にささげた白髭先生^{しろひげ}

近 藤 坦 平^{たんぺい}
(1844~1929／鷺塚)



1 新しい医術を求めて江戸へ

近藤坦平は、弘化元年（1844）、碧海郡鷺塚村に祖父、父、伯父が医者という家系に生まれた。坦平は18歳のとき、父の勧めで、岡崎で医者をやっている宇都野龍碩（りゅうせき・父の従弟）と共に医術を学ぶために江戸に行った。ところが龍碩が藩の事情で1年もしないうちに帰郷することになり、やむなく坦平も帰郷した。

翌文久3年（1863）江戸留学への思い捨てがたく、龍碩の弟碩遵（せきじゅん・坦平より2歳下）を伴い再び江戸に出た。時の将軍家茂が上洛した年である。西洋医戸塚静海に学んだが、戸塚は忙しく、直接学ぶことが出来なかった。そんなとき、長崎から戻った松本良順に学ぶ機会が得られ、碩遵らと共に喜び学んだ。

2 長崎に留学

松本の下で1年が過ぎようとしていた元治元年（1864）、松本の長男と共に長崎に留学した。長崎では、精得館（日本最初の西洋式病院）においてボードウィン、ポンペなど当時有名なオランダの医学者に学んだ。

そこで、橋本綱常（つなつね・安政の大獄で殺された橋本左内の実弟で、後に東大医学部教授など要職を務める）や長与専斎（後に日本の衛生行政の確立に努めた医学界の重鎮）らと交流をもった。

しかし、長崎に学んで3年が過ぎた頃から幕末を迎え、世情が穏やかならない状況になり、学友は故郷に帰ったり、江戸に出た。坦平も長与らに江戸行きを勧められたが、故郷で親の跡を継ぐことを決意し、帰郷の途についた。慶応4年（1868）のことであった。

3 大きく変動する社会、鷺塚騒動に遭遇

明治元年（1868）24歳で郷里に帰った。すぐに岡崎の宇都野龍碩の16歳になる長女の多田と結婚し、地域医療への第一歩を順調にスタートさせた。

しかし、時代の波は鷺塚にも及んだ。新政府による「廃仏毀釈」の方針に関する菊間藩（当地を治めていた沼津藩が現千葉県菊間に転封されたので菊間藩になった）の出方に不満をもった寺の住職（星川法沢・ほうたくや石川台嶺・たいれいが中心）たちと本願寺門徒衆が菊間藩役人と騒動をおこした。（鷺塚騒動、大浜騒動や菊間藩事件などと言われる）明治4年（1871）のことである。坦平もけがの治療にあたったと思われる。多くの負傷者が出、役人の1人藤岡薫が殺された。（鷺塚の当地に藤岡地藏堂がある）後に騒動をおこした首謀者や関係者が処刑されるなど大きな傷跡を残した。

4 「洋々堂」「蜜蜂義塾」の立ち上げ

鷺塚騒動翌年の明治5年（1872）、坦平は父の引退を受け、完全な蘭方医として「洋々堂」という看板を上げた。ところが村人は、なかなか蘭方医学がなじめず、しばらくは嫌がられた。

また、坦平は明治5年、「蜜蜂義塾」も同時に開設した。当初は洋々堂の不振と重なり、4名の塾生からの出発であったが、医院の隆盛と共に、明治8年（1875）

頃になると、東海地方で唯一の西洋医学塾として塾生の数も増え出した。

この年、父は坦平の弟良薫（りょうくん・神奈川医師会の初代会長で福澤諭吉の養女と結婚）と末弟浩平が東京や横浜で生活していたこともあり、父の従弟の子で、良薫と生活し、神奈川県医になろうとしていた水平を養子にした。その後、坦平の義弟になった水平は蜜蜂義塾の副塾頭として、坦平の片腕となった。その翌年明治9年（1876）には、塾生も80名を越すようになり、洋々堂は病院や塾で大所帯になり、地域と一体になって大繁盛した。

5 地域医療に専念

何もかも順調に進んでいたその年（明治9年）長男が夭折したり、ふくらんだ塾の風紀が乱れたりしたが、妻多田の聡明な協力もあり、立ち直っていった。明治12年（1879）には、三男乾郎（けんろう・二男も夭折）が産まれた。名古屋に愛知県医学校が出来たこともあり、塾生も適正な人数になり、近郷はもちろんだが、静岡や長野、県内でも幸田、幡豆、半田辺りからも患者が泊まりがけでやってくるようになった。民家が病室になったり、宿屋やいろんな店が出来、洋々堂のお陰で村が繁栄した。また、坦平は愛知県会議員の選挙で副議長に選ばれ、新しい活躍の場が広がられることになった。

しかし、その年（明治12年）義弟の水平が西尾に「近藤医館」を開き、驚塚を去った。明治15年（1882）、坦平38歳の年、医学校通則が出され、運営上困難であることを悟り、坦平は蜜蜂義塾を閉じることを決断した。更に漢方医らの抵抗もあったりしたが、時代の流れに背くことなく生きた。

また、坦平は地域への寄贈を惜しみなく行い、人望、財力ともに恵まれ、人々から尊敬された。（明治20年の「名誉力競」という三河国碧海郡の名誉番付で横綱なしの大関だった）

6 野口英世の手を手術した娘婿、近藤次繁^{つぐしげ}

洋々堂が栄えていた明治23年（1890）、坦平の長女おきては、信州松本の藩士鶴見家の二男で、帝国大学医科大学（現 東大医学部）の学生次繁を婿養子に迎えた。次繁は、洋々堂を手伝ったが、明治25年（1892）にドイツなどに坦平の援助で留学した。3年後帰国（次繁28歳、おきて21歳）し、洋々堂を洋々医館と改称した。

明治30年（1897）、次繁は東大助教授（すぐに教授）として上京した。そこで野口英世の手の2回目の手術を無料で行った。その後日本の外科学を欧州の水準にまで高め、外科学の権威として名を馳せた。岸田劉生作の「近藤医学博士像」の油絵も残っている。

7 晩年の坦平

坦平は60歳を過ぎても自ら手術を行ったり、村会議員や医師会の要職を務めた。息子乾郎を院長にし、一線を退いたが、功績により数々の表彰を受けた。

その後乾郎も上京したが、坦平は昭和4年（1929）に亡くなった。洋々医館は別の医師によって昭和55年（1980）まで続いた。今その地に「洋々医館跡」という石碑が立っている。

◆もっと知りたいなら

- ・『近藤坦平物語』
（平21市史料別巻4 浅井久夫）
- ・『近藤坦平の業績及びその一族の人々』（碧南市医師会・安井広）
- ・『驚塚騒動と洋々医館』
（愛教大同窓会誌・北村恒）
- ・『近藤坦平』
（三河教育研究誌土屋利男）
- ・『近藤坦平翁』
（平19季刊誌『みどり』石川繁治）

山 田 忠 治
(1883~1971／鷺塚)



1 いたずら好きの少年時代

山田忠治は明治 16 年（1883）、鷺塚村（現 碧南市鷺塚町五丁目）に山田小吉の二男として生まれた。満 5 歳のとき第十学区鷺塚学校（現 市立鷺塚小学校）に入学した。当時としても 1 年早い入学だが、父が当時戸長などをやり毎日役場に行き、家が留守になるときが多いからということだった。そこを卒業して明治 30 年県立第二尋常中学校（現 岡崎高等学校）へ第 3 回生として入学した。

子どもの頃は腕白で、小学校の低学年の頃 1 人で大浜港より伊勢へ抜け参り（黙って伊勢神宮へ参詣すると御利益が大きいとされた）をして、家族を慌てさせたり、4 つ歳上の近藤乾郎（けんろう・洋々医館の近藤坦平の跡取り息子で、後医学博士）に平気でいたずらしたりした。

2 坂本龍馬の甥、吉田数馬が校長をしている土佐海南中学校に編入学

明治 31 年（1898）のことである。高知県尋常中学海南学校（現 高知県立高知小津高等学校）長の吉田数馬（坂本龍馬の甥）が岡崎を訪れ、海南学校の校風を話したことがあった。それに感動した岡崎町の小学校長の岡田（近藤乾郎の義兄）が、自分の子息ともう一人を海南中学校に転入させた。そのことと、土佐出身の上級生の小野豊吉の勧めもあり、翌明治 32 年（1899）、忠治は父に内緒で土佐にわたり、吉田校長宅を訪れた。吉田から「自分の家に住み込み、書生になれ」と言われ、喜んで書生になった。校長が馬に乗って登校するとき、忠治が馬のくつわを引いていったという。3 年生に転入学を許可されてから親に手紙を出して許しを乞うた。

また、世間は広いようで狭いもので、近藤次繁（つぐしげ・近藤坦平の娘婿で、後に東大教授となり、日本の外科医の権威）の実兄の鶴見次昌が、海南中学校で英語の教師をしていたのだ。この鶴見から父に連絡が入り、父も大変安心したという。

3 護国の血汐をたぎらせ、海軍兵学校に入学

おそらく日露の風雲急なるに対して、護国の熱情（軍人志願）が忠治を土佐に走らせたのであろう。ところが長兄が 28 歳の若さで病死し、父は忠治の軍人になるのを反対した。そこで忠治は「一度だけ海軍兵学校を受験させてください」と父に頼み、許されて受験した。何と一度で海兵入試の難関を突破してしまったのである。

明治 35 年（1902）12 月、海軍兵学校 33 期生徒として江田島へ赴いた。天下の俊秀が集まり、同期生は 180 名いた。在学中に日露戦争が始まり、最上級生になったとき、山本海軍大臣に「第一線に出陣させてくれ」とみんなで嘆願した。しかし、「戦争は先輩に任せ、しっかり勉強せよ」と言われた。明治 38 年（1905）、海軍兵学校を卒業、このときはもう日露戦争は終わっていた。

4 水上機高度の世界新記録を樹立

明治 44 年（1911）12 月、海軍大尉に任官、翌年の 2 月、新川の材木商岩田以手紙の長女うたと結婚した。そして、航空搭乗員を志願し、その年 7 月に渡米した。アメリカでは操縦術練習をして年末に帰国した。アメリカで操縦免許を取得した日

本人の 3 人目であった。(軍人としては初) 帰国後忠治は、カーチス式(アメリカ産で、主翼が二重になっている複葉水上機・75 馬力)の教官に任ぜられた。

大正 2 年(1913)、横須賀鎮守府司令長官より、「飛行機の研究に従事せよ」との訓令を受け、未知の航空界を開拓する第一人者となった。そして、教官となって練習将校を指導した。翌年の大正 3 年(1914) 6 月 24 日、水上機で高度 2500 メートルまで上昇し、当時としては水上機高度の世界新記録を作った。

5 第一次世界大戦で、飛行隊として活躍

この頃からヨーロッパには戦雲が立ちこめ、間もなく第一次世界大戦が勃発した。日本も参戦し、初めての飛行機での実戦が行われた。当時、揃いの飛行服などなく、忠治の飛行帽は、愛妻うたの手編みの毛糸で、目のところだけが出て、頭や顔はすっぽり入るという覆面式だった。

飛行目的は偵察であったが、攻撃も行い、空中戦もあった。地上から小銃や機銃で撃たれたり、忠治搭乗の機は、駆逐艦を狙ったのが全部外れ、運良く水雷艇に爆弾を命中させ命拾いをしたこともあった。飛行隊は連日偵察、攻撃を行い、平時の数倍活動して事故ゼロで、忠治は軍人としての最高の勲章、(きんし) 勲章(功 5 級)・年金 300 円及び五等旭日章を授かった。

6 飛行訓練で新須磨に着陸、大勢の見物人の中で錦を飾る

大正 7 年(1918)、横須賀航空飛行隊長のとき、長距離飛行訓練として追浜(神奈川県横須賀市)と碧南新須磨を忠治はコースとして選んだ。これは新須磨が水上機基地として立地条件が良かったのと、演習費の不足分を父や舅が村長や町長をしているので地元で負担してもらうことが出来ると考えて決めたのだ。忠治の計画は当たり、2 月 26 日から 3 月 1 日まで新須磨は、当時珍しかった飛行機を見ようと、すごい人出であった。忠治も故郷へ錦を飾ることが出来た。

7 「予科練」の生みの親

大正 8 年(1919) 2 月、虫様突起炎の後、海上航海の激務のため無理がたたって翌年から肺尖炎(初期結核症)のため転地療養を余儀なくされ、その後休職した。大正 12 年(1923) 4 月に肺尖炎は全治した。このとき忠治は 40 歳であった。実はもっと早く完治していたのだが、地元洋々医館で、幼なじみの近藤乾郎博士が慎重に慎重を期したせいだと言われている。

復職後もやはり飛行関係の仕事をやり、昭和 3 年(1928) 忠治が海軍省へ上申した意見が採用され、海軍飛行予科練習生が募集されるようになった。そのとき、海軍大佐になり教頭や校長などを歴任した。「赤い血汐の予科練の……」の生みの親は、山田大佐ということになる。昭和 9 年(1934)、海軍少将になった。

昭和 11 年(1936) 予備役となり、長年着慣れた軍服を脱いだ。そのとき山本五十六元帥(海軍大将)に「大艦巨砲主義は時代遅れである。巨砲主義より飛行機主義に変えよ」と進言した。

8 田畑を耕し、暮を楽しんだ晩年

昭和 20 年(1945)、大空襲で東京の自宅は焼失したが、23 年まで終戦の処理の仕事をした。戦後、63 歳で鷺塚に帰り、日中は百姓をやり、土曜の夜は暮をやった。昭和 46 年(1971)、88 歳で死去した。

◆もっと知りたいなら

・『元海軍少将 山田忠治伝』

(昭 46 市史料第 12 巻林口孝)

・『山田忠治伝』

(昭 63「わしづかの今昔」山田五良)

伊藤 証 信
(1876～1963／西端)



1 実家で靈感に打たれ、無我愛の生活に一変

伊藤証信は、明治9年(1876)三重県員弁郡(現桑名市)の農業、伊藤清五郎の長男として生まれた。両親は熱心な浄土真宗の信者であったことから、13歳で伊藤家の菩提寺の源流寺に小僧として住み込んだ。

16歳で大垣の美濃教校(真宗大谷派)に入り、19歳まで在学、仕送りが少なかったため毎日二食で過ごした。(生涯続いた)後京都の真宗中学の4年に編入された。続いて真宗大学に入り、学術優秀・品行方正のため特待生になった。大学は東京に移転(清沢満之が学監)され、卒業論文のために毎日図書館通いしていた。

明治37年(1904)8月27日の夜、桑名の実家に帰省中の証信は、父と一緒に蚊帳の中に寝ていたが、その夜不思議な靈感に打たれて法悦の涙にひたった。その夜を境として、証信の生活態度は一変した。「我愛の生活」を脱して、「無我愛の生活」に進進するに至ったのだ。

証信は村の共有仏堂である古ぼけた大日堂を住み家とし、「無我苑」と名づけ、「無我愛伝道」を始めた。機関誌「無我の愛」を発行し、そこを訪れる真宗大学生の求道者が多くなったので、大学は学生の出入りを禁止した。そこで30歳の証信は無我苑を解散、本願寺僧籍も返上して「脱宗号」を発刊し、各方面に多大の反響を呼んだ。中でも徳富蘆花、幸徳秋水、堺利彦らの著名人から祝意や批判の手紙が寄せられた。

無我苑の解散後、しばらくの間西ヶ原の農園に園丁として労働の日々を過ごした。その後明治39年(1906)、山口県の徳山女学校の教諭になることになった。

2 4年間の徳山女学校時代、竹内あさ子と結婚

徳山女学校に赴任すると、克己修道(三食、二食から断食)の生活を始めた。このような生活を4ヶ年続け、「食欲から離脱しようとしたのは、一種の我慢であった。人間の徹べき道を通らずに、一足飛びに理想の彼岸に到達しようと考え、いつしか我慢の泥沼にはまっていた」と気づいた。

ちょうどその頃、徳山町(現山口県周南市)に医家の娘、竹内あさ子がいた。彼女は6歳のとき、急に髪の毛が抜けて丸坊主になってしまい、元に戻らなかった。寂しい日々を送っていたある日、「無我の愛」を読んだ。「人間はいかなる境遇にあっても、この世に生まれて来たからには絶体の価値がある」そんな言葉に心を打たれていたとき、証信を紹介され、話を聞き、往復している間にあさ子に恋愛感情がわき起こり結婚した。その後、証信は女学校を辞し、妻を伴い上京した。

3 「信念」の確立と精神運動の開始

千駄ヶ谷で「我生活社」の看板を掲げた。ところが発表した論説が、その筋の忌諱にふれるということで、証信は出版法違反で5日間入獄させられた。

大正5年(1916)1月、宗教新聞「中外日報」の主筆として、夫妻は京都東山に移った。足かけ4年間、社説の他に「信仰問答」欄を担当し、読者に深い感銘を与えた。大正8年(1919)8月、中外日報が急に廃刊になったので、証信夫妻は11月末に上京、神田神保町に落ち着いた。そして、そこを「信仰策進会」の本部と定め、機関誌「精神運動」も発刊、積極的に無我愛運動を開始するに至った。

その運動は好評を博した。その頃出入りしていた女性の中には、平塚らいてう、市川房枝、与謝野晶子など著名な婦人解放運動家もいた。証信の教えを直接受けようと来訪者が多くなり、大正 10 年（1921）の春に中野に移った。あさ子の提案で「愛聖」を創刊することにし、暁烏敏（あけがらすはや・清沢満之の一番弟子で浩浩洞同人）、河上肇、与謝野晶子、平塚らいてう、津田青楓（画壇の長老）ら一流の人達の寄稿があった。そして、証信は思索と研究に没頭し、西田幾多郎の著書を全部読了した。

また、同年 8 月に武者小路実篤の「新しき村」（宮崎県日向市）を訪れた。武者小路らと交流し、大きな感銘を受けた。後年、武者小路も西端の無我苑を訪れたことがあるという。思想にも信念の上にも共通の点が多いものと察せられる。

大正 11 年（1922）6 月 9 日から 4 日間にわたって「無我愛同朋全国大会」を中野無我苑で開催し、空前絶後の盛況であった。

4 「竜灯団」に招かれ西端に移り、国外にも目を向ける

証信夫妻が西端に移ったのは、大正 14 年（1925）4 月のことである。証信 49 歳のときである。西端の「竜灯団」の青年求道者たちから、衣食住の一切を負担するからとの条件で招かれた。

昭和 8 年（1933）2 月、西端に無我苑の本部道場を建設すべく発願した。全国から同志の寄附を求め、翌 9 年 1 月には、木造 2 階建ての居室、本部道場など、2 年後には全てが完成した。支援者の中には、倉田百三、藤井達吉、森信三、富本憲吉、与謝野晶子、暁烏敏などそうそうたる面々が顔を連ねた。

昭和 11 年（1936）には、多種多様な宗教を一つに統一しようと「万教協和連盟」を創立させた。東京に居を移し、約 2 ヶ年にわたって各方面に運動した。多くの著名人の賛同も得たが、成果を挙げることが出来ず、西端に引き上げた。

満州には昭和 14 年（1939）から 4 回渡満し、講義や講演をし無我愛を説いた。

また、太平洋戦争終結後の証信は、「世界連邦建設同盟」に参加したり、「日本自由宗教連盟」に加わり、活躍したりした。昭和 27 年（1952）には、広島市で開催された「世界連邦アジア会議」にも夫妻で出席した。

証信が晩年の研究課題として、最も力を注いだのは、「意識主体論」であった。

「意識主体」という言葉は、証信の新造語であるが、この研究は、「靈魂不滅の科学的研究」から発足したものであると、その論文で述べている。証信の研究態度は厳粛且つ綿密で、古来の仏教書はもとより、現代物理学、化学、生理学、心理学の書籍をひもとくばかりではなく、直接物理学者を訪れて研究したほどであった。

5 晩年の証信、87歳で「進生」（死去）をむかえる

証信は煙草は吸わず、酒少々、囲碁は好きであった。弟子の一人千葉耕堂は、証信の容貌について「先生は一見威風堂々とか、貴公子然たる風采ではなく、見るからに平凡なオヤジであったが、その眼の光沢を見ると、まさしく凡人でないという感を抱かせられた。眼全体がブドウ色に光っており、相手を威服する力をもっていた」と書いている。昭和 38 年（1963）1 月 14 日、11 時頃ゆっくり湯浴みして上がった途端、卒倒してそのまま呼吸が絶えた。

享年 87 歳であった。

証信の「進生式」に、長年研究の友として親しかった森信三は、次の歌を靈前に供えた。「巨いなる野の哲人よ 無我愛の真理に生きてひと代つらぬく」まさに証信の一生を象徴させた一言葉であると言えよう。

◆もっと知りたいなら

・『無我愛運動史概観』（昭 45 千葉耕堂）

・『無我愛の哲学』（昭 8 伊藤証信）

・『伊藤証信』（平 8 季刊誌『みどり』

山崎正広）

※その他多数有り

た だ ゆ き
本 多 忠 鵬
(1856～1896／西端)



1 わずか10歳で西端藩の第二代藩主に

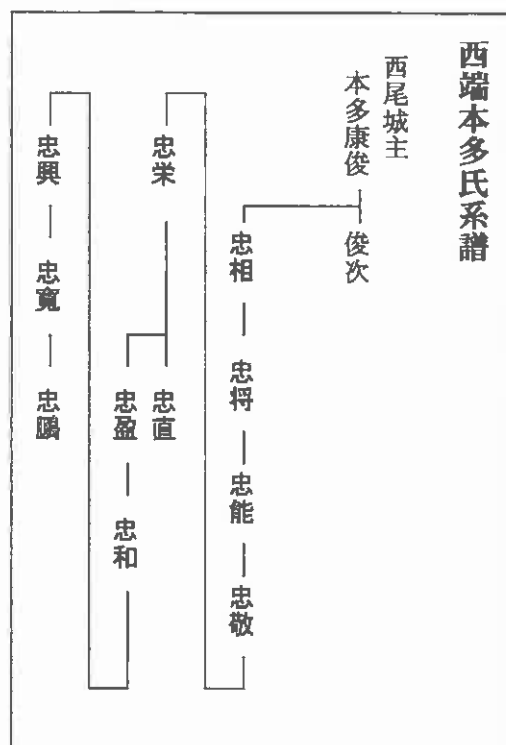
わずか10歳で西端藩の第二代藩主になった本多忠鵬は、安政3年(1856)、西端藩初代藩主の本多忠寛の子として生まれた。ときは幕末維新の混乱の真っ只中、時代の波に翻弄されながら、明治4年(1871)には、廃藩を迎えたのである。

それでは、西端領主から始まった西端藩とはどのように生まれたのであろうか。

2 西端領主の初代は、西尾城主二男の本多忠相^{ただすけ}

西尾城主本多康俊の二男忠相は、大阪夏の陣に、父康俊、兄俊次と共に二代將軍徳川秀忠に従って出陣し、戦功をたてた。その行賞として、元和2年(1616)、はじめて碧海郡西端村(現 碧南市)八百二十八石、城ヶ入村(現 安城市)百七十二石の合わせて千石の石高(領地)を与えられた。

これによって、西端本多氏による知行の基が開かれた。ただ、西端村に領地を得たが、旗本として江戸に住まいし、江戸城勤務であった。



3 二代目忠将^{ただまさ}から九千石の旗本に

忠相はその後、下総国・上総国(現 千葉県)、碧海郡、武蔵国(現 東京都)で加増を受け、八千石の旗本となった。

二代目忠将は、天和2年(1682)、下野国(現 栃木県)、上野国(現 群馬県)で千石加増され、合わせて九千石となり、幕府旗本中で筆頭の序列となった。以後九代目まで九千石の知行が続いた。

4 十代目忠寛^{ただひろ}が西端藩の大名に

九代目の忠興(ただおき)の後を次いだ十代目忠寛は、嘉永6年(1853)、ペリーが来航すると、家禄が万石に足りなくても藩屏の任(幕府を守る任)を担当して羽田表品川台場へ出兵した。

更に元治元年(1864)、水戸天狗党の乱が起こると、忠寛は志願して鎮圧に参加した。この役の行賞として、同年12月新たに伊豆国で九百五十石が加増され、合計一万五百石余となって、大名の列に加えられた。

藩名は本多家が最初に賜った領地西端村の名をとって西端藩とされた。

5 大政奉還を迎え、勤王尊奉を誓う

慶応2年(1866)、父忠寛の隠居により、忠鵬は10歳で家督を相続した。この頃の国内は、勤王佐幕論の煮えかえるような騒ぎの真っ只中であつた。

翌慶応3年(1867)10月には、大政奉還が行われ、忠鵬も年少の大名として、家臣に諮問の上進退を決せざるを得なかった。尾張藩の如き親藩でさえ、勤王方に転身して、西端藩へも勤王を説き勧めてきた。忠鵬は家臣の勧めもあつて、慶応4年(1868)2月、勤王尊奉の証書を出している。忠鵬12歳のときである。

6 家族や家来を連れて西端村に初めて住む

同年4月、忠鵬は江戸の形勢危ないと見て、家族、家来の大部分、総勢118人の一隊で、品川からイギリスの蒸気船に便乗して大浜港へ上陸し、西端村へ移住した。西端藩といいながら、藩主以下家臣が西端村に住んだのは、これが初めてである。一行は、西端陣屋や応仁寺、庄屋宅等に分宿した。

忠鵬は、着村早々領内5か村の庄屋に命じて農兵を募集し、家臣を西尾藩へ通勤させて、武術、特に洋式調練、鉄砲操法を学ばせた。旧字の調練の松林を伐り開いて練兵場を設け、応募してきた農兵に洋式調練を習技させた。

7 西端藩知事(13歳)→西端県知事(15歳)→政府の官吏(15歳・子爵)

明治元年と改元されたこの年9月、忠鵬は京都へ上洛し、天皇に伺候(参上し、ご機嫌を伺う)た。そして、勤王誓約の旨を言上してきた。

翌明治2年(1869)6月、版籍を明治政府に奉還すると、忠鵬は13歳で西端藩知事に任命された。忠鵬は住んでいた陣屋の南隣の民有地を買い上げ、そこに藩庁(後に県庁)を建造した。

明治4年(1871)7月、廃藩置県令が布告され、西端藩は西端県の名に改まり、忠鵬の西端藩知事も西端県知事に改められた。

更に同年11月、県治条例が發布され、西端県は廃止になり、額田県に組み込まれることになった。県知事忠鵬も免ぜられて、東京府貫属(東京府の管轄下)になり、上京して小石川の元の屋敷に住むことになった。

これで忠鵬も明治政府の一官吏に転身し、華族に列して子爵に叙せられた。しかし、経済的にはあまり厚遇を得なかった。

8 転変の人生を思いつつ、西端村で死去

明治28年(1895)、39歳になった忠鵬は病気になり、西端村へ来て療養生活を送った。しかし、翌年、名古屋市愛知病院で亡くなった。そして、西端栄願寺で葬儀を行い、後に康順寺へ埋葬された。

激動の時代に10歳で家督を継ぎ、わずか5年の間に藩主→藩知事→県知事→官吏(子爵)と、めまぐるしい人生であった。忠鵬の遺品として、旧家臣長谷川氏宅に忠鵬作筆の漢詩屏風が遺されている。忠鵬の死去の前年に詠まれたものである。内容は、武士の時代を懐かしむものとなっていて、転変の人生を送った忠鵬の気持ちがうかがえる。

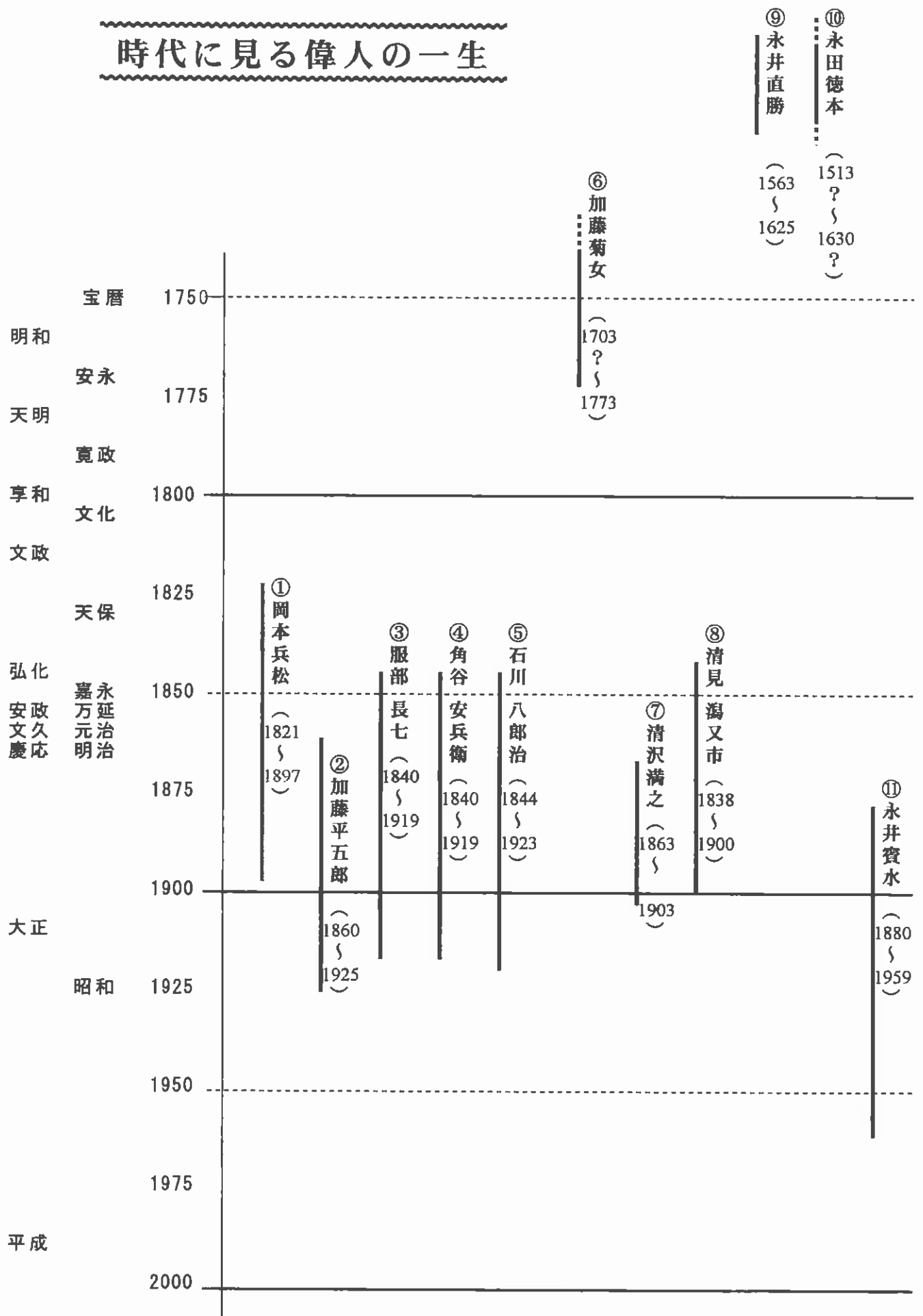
現在では、忠鵬の子孫は確認されていない。

◆もっと知りたいなら

・『本多忠鵬』

(平20季刊誌『みどり』杉浦明)

時代に見る偉人の一生



碧南の出来事

- ・ 矢作新川開削
1604
- ・ 西端村本多氏知行
1616
- ・ 油ヶ淵1644
- ・ 平七新田1663
- ・ 伏見屋新田1666
- ・ 伏見屋外新田
1746

日本の出来事

- ・ 豊臣秀吉が全国統一
1590
- ・ 徳川家康が征夷大将軍になる
1603

- ・ 享保の改革 1716

- ・ 大浜藩成立
1769
- ・ 大浜藩→沼津藩
1777

- ・ 寛政の改革 1787

- ・ 前浜新田1827

- ・ 沼津藩→菊間藩
1868
- ・ 鷺塚騒動1871
- ・ 西端藩→西端県
- ・ 菊間藩→菊間県
- ・ 共に額田県1871
- ・ 額田県→愛知県
1872

- ・ 天保の改革 1841

- ・ 明治用水1880
- ・ 大浜村→北大浜村
が分村1883
- ・ 棚尾村→北棚尾村
が分村1883
- ・ 北大浜村+北棚尾
村→北大浜村・志
貴崎村1889
- ・ 北大浜村→新川町
1892

- ・ ペリー浦賀入港
1853
- ・ 安政の大獄 1859
- ・ 大政奉還 1867
- ・ 西南戦争 1877
- ・ 大日本国憲法発
布 1889
- ・ 日清戦争 1894

- ・ 旭村出来る 1906

- ・ 日露戦争 1904
- ・ 第一次世界大戦
1914

- ・ 平和用水1908
- ・ 棚尾村→棚尾町
1924
- ・ 東南海地震1944
- ・ 三河地震1945
- ・ 碧南市成立1948

- ・ 関東大震災 1923
- ・ 満州事変 1931
- ・ 日中戦争 1937
- ・ 太平洋戦争 1941
- ・ 日本国憲法の発
布 1946

- ・ 西端、碧南に合
併1955
- ・ 伊勢湾台風1959
- ・ 衣浦港起工1964
- ・ 衣浦臨海工業地
帯埋立着工1965

- ・ サンフランシスコ
平和条約 1951
- ・ 日米安全保障条
約 1951

①⑥ 山中
信天翁
(1822
〜
1885)

①⑦ 近藤垣平
(1844
〜
1929)

②⑩ 本多忠勝
(1856
〜
1896)

①⑧ 山田
忠治
(1883
〜
1971)

①⑨ 伊藤
証信
(1876
〜
1963)

①② 永坂奎兵衛
(1873
〜
1966)

①③ 平岩
種治郎
(1880
〜
1952)

①④ 藤井
達吉
(1881
〜
1964)

①⑤ 平岩
千代治
(1921
〜
1975)

あとがき

碧南の偉人については、昭和63年（1988）、「市制施行40周年記念要覧・人物篇」（碧南市民全戸に配布）で30人の偉人について小学生がゆかりの地を訪問し、偉人と会話するという形で紹介している。しかも簡単なプロフィールと親しみやすいイラスト付きの冊子である。

その後、平成9年（1997）の1月から平成11年（1999）6月にかけて、その偉人たちを30回にわたり市広報にシリーズ連載した。そして今ではインターネットでも見ることができる。

さて今回は、その30人の中からもう少し詳しい内容のものを、ただあまり長くならずに読みやすいものを作ろうと編集した。小中学校の教師が地域学習などのための入門資料として、また一般市民がもう少し調べてみようとするためのきっかけづくりとして役立ててもらえれば幸いである。そのために市史資料調査室等にある資料の紹介もさせていただいた。

市史資料室にある偉人伝のような詳細なものは、市史料第5集「山中信天翁」、同第8集「服部長七伝」、同第11集「藤井達吉翁」、同第14集「徳本翁」、同第35集「元海軍少将山田忠治伝」、同第37集「碧南の著名人略年譜」、同第45集「碧南の著名人略年譜（二）」、市史料別巻2「平岩千代治の話」、同別巻3「藤井達吉物語」、同別巻4「近藤坦平物語」、同別巻5「服部長七物語」などがある。

なお本稿を編集・執筆するにあたり季刊誌「みどり」（株・エムアイシーグループ編集室発行・編集）をはじめ、「もっと知りたいなら」で挙げた資料等を参考にさせていただいたこと、表紙切り絵の稲垣尚人氏（南中）、また校閲していただいた碧南市文化財保護審議会委員の石川繁治氏に感謝の意を込め、ここに記したい。

本稿は特に教員向けということもあり、偉人ゆかりの地を現在の小学校区別に編集してみた。したがって地区によって偏りがあることはご理解願いたい。また、今回取りあげた20人の偉人は、偉人としての軽重ということではなく、比較的資料があった人たちである。その他の人たちについても今後資料を収集し、いつかまとめて発行することができればと願っている。

平成22年12月

碧南市史資料調査室

執筆・編集 浅井 久夫

平成22年12月発行

発 行	碧南市教育委員会
執筆編集	文化財課市史資料調査室
	碧南市源氏神明町2番地
	TEL 0566-41-4566